
Someday

紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S o m e d a y

【Nコード】

N 4 1 3 9 B

【作者名】

紫

【あらすじ】

主人公である茜と翔一郎。二人の高校生の切ない恋愛事情を描くラブストーリー。

プロローグ（前書き）

紫です。この小説は当初、18禁の小説として投稿していたものです。内容がほとんど18禁のものではないと判断し、一般の方へ投稿させて頂きました。感想、批評随時お待ちしております。

プロローグ

一目。

ただ最初に見た時はなんとも思わなかった。
でも何故だか私の頭に深く印象を残した。

☆

「じゃまずお名前から」

「はい。宮城茜みやぎあかねです」

私のかねてから志望していた商業高校の推薦入試の面接を受けている。多少緊張しながら受けた面接はなかなかの好印象を与えたと思う。

「ではこれで終わりますので気をつけて帰ってください」

面接を終え私は面接官に丁寧にお辞儀をし、会場である教室を後にする。

「次どうぞ」

廊下に椅子だけ設置してある小さな待機場所にいた男子が立ち上がる。

長身細身で綺麗な栗毛の男子生徒。

私は横目でしか見なかったがその男子生徒が強く印象に残った。

（…てか商業高校でも志望する男子いるんだ）

商業高校と言えば全校生徒の大半を女子生徒が埋める。その中の男子となるとパソコンとかそっち系の分類の人達がほとんどだ。でも彼からはそんな雰囲気を感じなかった。

名残惜しむなんて何か変か。

私は荷物を持って学校を出た。

1. 桜の木

4月。

この地域の桜開花は他より遅めだがそんな桜もちらほら咲き始めた頃。

今日は高校の入学式。

年が明ける前に受けた面接試験も難なく合格し、晴れて今日から高校生だ。

私は正門の両端にある大きな桜の気を眺めていた。

「茜！何してんの！体育館こっちだから早く来なさい！」

入学式に付き添う母が迷惑そうに私を呼ぶ。

「ちょっとくらい浸らせてくれたっていいじゃん」

「そんなの入学式が終わったらたっぷりすればいいのよ！」

そんなに急かさなくてもまだ式が始まるまで20分もあるのに。膨れっ面になりながら母に手を引かれ体育館へ入った。

☆

館内は予想以上に人がいた。20分前だというのに新入生達は顔をこわばらせながら用意された席に座っている。

私も造花のバッジを胸につけ指定された席へ座った。

（そういえばあの男子は…）

私はさりげなく周りを見渡したが四方八方セーラー服ばかりだ。

（なんかキヨロキヨロするのも恥ずかしいな）

私は面接で見た男子の探索をやめた。

間もなく式が始まり、校長の言葉や野球部による校歌の合唱などがあり1時間程度で式は終わった。

☆

1年8組。

私のクラス。

さすがに高校にもなると生徒数も多いため一学年10組まである。名簿番号は40人いる中の34番。

教室まで行く途中にいろんな部活動からの勧誘のチラシをもらいお目当ての教室に辿り着いた。

（一番後ろだ）

私はその席に腰掛け一息ついた。

知らない顔ばかり。

同じ中学の子も何人か入学したがクラスは違うようだ。すると前の入口に学制服が見えた。

（あ、まさか…）

入ってきた瞬間騒がしかった教室内は一気に静まりその男子生徒に視線が集まる。

（男子も7人だけいるんだしね）

その男子は面接の時の生徒とは違った。
しかしかなりの長身でなかなかの豊かな体。眼鏡をかけて何だかモジモジしている。

（なるほど…）

私はすぐさま彼のイメージを悟った。
それからぼつぼつ男子生徒が入ってきたが面接の彼は入ってこない。
違うクラスかな。
私は頬杖を付きながら物思いに更けた。

始業開始5分前。

ほとんどの生徒が着席し空席は一番窓際の一歩前の席だけになった。

（あそこの男子遅刻かな…）

名簿の最初から7人分は男子が並び後は女子なので一番前なら男子だと分かる。

それにしても入学式早々遅刻とは。

私は見知らぬ男子生徒に呆れていると教室の扉が開いた。
学生服が目映る。

不思議な緊張感が私の心臓の鼓動を速くした。

（来た…！）

2. 不思議

扉が開く。

クラス全員の視線が扉に注がれる。

「ここかー」

現れたのは小柄な男子生徒。

顔立ちは整っているがかなり童顔だ。

またもや期待は外れた。

「ちげーよ。お前は隣。ここは俺のクラス」

小柄な男子の体を引っ張り後ろから他の男子生徒が顔を出した。

(…あっ！)

その後ろからきた彼こそ、面接時印象に残った男子だった。

私はとっさに配布されていた名簿に目を通す。

(赤川…翔一郎…)

彼の名前だ。

私は再度確認する。

長身細身で綺麗な栗毛。整った顔立ちで切長の目。顔までは見てなかったが恐らくあの日の彼だろう。彼は連れの男子と挨拶を交わし一番前の席につく。

何だろう。

彼からは落ち着いた雰囲気を感じる。

窓の外を見る後ろ姿は何だか私に安心感のようなものを感じさせる。

後に担任の紹介があり授業等のシステムの説明がありお決まりの自己紹介が始まる。

「じゃ：一番最初からいこっか」

先生があの子に目をやる。

彼はゆっくり立ち上がって自己紹介を始めた。

「赤川翔一郎。北中学出身っす。野球やってたんで野球部に入ろうかなと思ってます。1年間よろしく」

拍手がおこる。

そして彼が着席し後ろの生徒が立ち上がり次々と自己紹介をしている。

その間も私はチラチラ彼の方を見ていた。

隣の女子生徒と楽しげに話している。

友達かな。

近寄り難い雰囲気あるけど意外と社交的かも。

すると私の順番が来てやや緊張気味に立ち上がる。

「えと：宮城茜です。南中学から来ました。バレーボール部に入りたいです。仲良くしましょう」

拍手がおこり変な照れを感じながら席についた。

それからすぐに自己紹介タイムも終わると同時に休み時間になった。

彼の前に一人の女子生徒が立って何やら話している。

(モテそうだなあ…)

するとお互いに携帯電話を取り出した。
多分アドレスとか交換してるんだろな。

私も無意識に携帯を取り出し意味もなく電話帳画面を開く。

男子のメモリは一人だけ。

高校は違うけど中学から付き合っている彼氏、なかいゆうや仲井雄也の名前のみだ。

最近は全くメールも電話も連絡と呼べるものは一切取っていない。
そんな状態が3ヶ月ほど続いている友達には

「別れた方がいい」とか

「絶対他に女作ってる」

とか言われている。

私もズルズル行くのはいけないと思いつつもこちらから連絡するのは何かしやくに触る気がしてならない。

だから変な意地を張り続けてここまでに至る。

もう別れようかな。

嫌いじゃないけど好きとも言いきれない。

ただ単に恋人同士という肩書きだけで繋がっている関係。

どうしよ。そんなことを考えていると、さっき赤川くんとメアドを交換したであろう女子生徒が声を掛けてきた。

3. 印象は薄め

「宮城…さん？」

長身で腰まで伸びた黒髪をなびかせその生徒は近づく。

「うん」

「あたし近藤美希^{こんどうみき}。よろしくね」

彼女は気さくに握手を求めてきた。

「宮城茜です。よろしくね」

近藤さんは笑顔を見せた。大人びた雰囲気の子だな。

「じゃー茜って呼んでいい？」

え。

途端にテンションが変わったので少し驚きながら頷いた。

「よし。茜ってバレーやってたんだよね？あたしもバレーやってたからここでもバレーやるつもり。茜は？」

男勝りに喋る近藤さんは私に問いかける。

「うん。入るつもり」

「ポジションどこ？」

それからバレー談義に花が咲きあつと言う間に休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「あ、もう終わり？早いなあ。茜、番号交換しよ」

そう言って携帯を取り出しお互いの番号を交換し席に戻っていった。

（美希ちゃんおもしろい…）

私は早々にできた友達を思い一人にやけた。



一体何なんだよ。

近藤って女は。

まあ話しやすくて俺も接しやすいからいいけどさ。

俺は野球部の練習を見学しに行くためグラウンドへと歩を進めた。

「しょーいちっ！」

後ろから聞きなれた声で俺を呼ぶ声がした。振り向くとやたら足の速い小さな知り合いが掛けよってきた。

「一緒に行こって言ったじゃん！」

「おせーんだもんしゃあないじゃん」

俺の小学校からの友達、杉正宗すぎもと せいむねが俺の背中を軽く小突く。

授業後を狙ってか朝に続いて様々な部活動の勧誘が再開された。俺は野球部以外は興味なかったからチラシとか全部断ってきた。逆にそんな気もないくせに正宗はたくさんチラシを持ち歩いている。

「マサ、どーすんのさそれ。」

正宗は両手に握り締めたチラシを見て苦笑いした。

「俺こーゆーの断れなくて全部もらっちゃうんだよね。ほら、駅前ですべての店でもいいビラ配りとかも」

正宗はそれらのチラシを丁寧に折り曲げて鞆の中にしまった。

「向こうもシカト覚悟でやってんだからシカトすりゃいいんだよ」

「でも何かシカトとか可哀想でさ…」

「だからそーゆー時はだなあ…」

正宗とあれこれ言いあっているとこれも後ろから聞き覚えのある声がした。

「あれー、翔ちゃんじゃん！」近藤美希だ。

入学早々初対面のくせに気さくに話しかけてきた女だ。

別にそうゆう女は嫌いじゃないし美希の事もかなりの好印象だし。俺は正宗と接すると同じくらい扱いで美希に声をかける。

「ちゃんはやめろっての」

「別にいいじゃん。可愛さアピールだぜ」

いやいや。

アピールって何？

とりあえず呆れた表情を浮かべ返答とした。

「翔ちゃんは野球部見学？」

俺は首を縦に振る。

「あたしらもバレー部見学しに行くんだ」

美希は隣にいた友達の肩を組んだ。
確か同じクラスじゃなかったかな。

「えーっと、み…みや…宮崎？」

「宮城です」

つい思い出せず名前まで間違ってしまった。俺は一人気まずさを感じながら謝罪の意を表して宮城さんに少し頭を下げた。

「同じクラスじゃん！翔ちゃんちゃんと覚えなよっ！」

申し訳ない宮城さん。

「茜、なかなか可愛いくない？」

美希はそう言ってウィンクをした。

まあ可愛いっちゃ可愛い。

背はあまり高い方じゃないが、ショートヘアで少し茶色がかかった

髪は彼女を多少幼く見えさせる。

「美希よりはなあ」

俺は舌を出しておどけてみせた。

「うおらっ！でも茜にや彼氏いるから残念だったねえ」

美希は俺がしたように舌を出した。

だからどうした。

俺にとっちゃ宮城さんのプライベートは失礼だがどうでもいいんだよ。

俺は鼻で一息ついてから美希達にひらひらと手を振りグランドへ向かった。

その時は特に彼女にとって特別な感情はなかった。

ただあの笑顔を見るまでは。

俺の心を動かす笑顔を見るまでは。

4. 背中

5月。

校門の桜の木にはもうほとんど花びらは残っていない。

入学から1ヶ月。

私はバレー部に入部し部活に勉強に日々いそしんでいる。

「はあ、これで終わりだー」

体育館で部活の後片付けをしていた美希ちゃんが大きく伸びをして言った。

「終わったねえ」

つられて私も伸びをする。

外は暗くなり始め、空は夕暮れ時から夜へと変わる準備をしていた。

「さ、茜。部室戻ろっ」

私は頷きサポーターを持って体育館を出た。

グラウンドではまだサッカー部や陸上、そして野球部の生徒がが所狭しと駆け回っている。

「翔ちゃん達頑張ってるなー」

グラウンドに面した2階建ての部室棟の2階から、野球部が練習しているスペースを美希ちゃんとしばらく眺めていた。
みんなユニホームを着て誰が誰だかわからない。

「あれ正宗君じゃない？」

美希ちゃんは元気よく走っている小さな選手を指差して言った。
入学してから杉くんや赤川くんともよく話すようになった。

特に杉くんは気さくな人で誰にでも好かれる愛想のいい好青年だ。

「あれ、あれ翔ちゃんじゃない？」

美希ちゃんは二塁と三塁の間のポジション、ショートとかいった位置にいる3人いる中の一番後ろの選手を指差した。

「あれかなあ？」

「あれだよ。あのほった搔く仕草とかさっ」

赤川くんは癖なのか知らないが、よく人差し指でほった搔くところをみかける。

「てかもう3年生とか先輩に混ざってやってんだからすごいよねー」

他の新入部員はランナーをやったり隅で声を出していたりする。

しかし赤川くんは一人だけ実戦練習に参加している。

「すごいねー」

私はあまり野球を知らないが、たくさんいる野球部員の中でただ一人1年生ながらそういう練習をしている赤川くんに感心した。飛んできたボールを軽快にさばく姿はカッコいいと思った。

何だか先輩もいる中で一際、彼の背中だけが大きく輝いて見えた。

「翔ちゃんモテるんだよ」

美希ちゃんは不適な笑みを浮かべ私を見る。

「そうなんだ」

「何か女の子に番号聞かれてんのよく見るし。先輩とかも何人かいたよ」

私はそんな経験ないからただ

「へえ」

と感心するだけだった。

長身細身で整った顔立ち、あの切長の目に他の女子は見惚れてしまうのだろう。

それから部室に戻り、他愛もない会話をしながら着替えを済まし学校を後にした。

5. 漠然と

6月。

桜もすっかり散ってしまい、後から緑の若葉が生え揃っている。

私たち1年生はまだ入学間もないということで、当校毎年恒例らしい1年生だけのクラス内、クラス間の親睦を深めるための旅行を実施するらしい。

各クラス2名代表を決め、クラスで旅行の計画やオリエンテーションでの出し物を決めている。

「はいはい、何かある人手え上げてー」

今は自習の時間を使ってそれらの話し合いをしている最中だ。

教壇の前で美希ちゃんがよく通る声でみんなに問いかけた。

うちのクラス代表は美希ちゃんと、

「無いんならこっちでパパッと決めますけどいいんすかー」

赤川くんだ。

彼は何事にも積極的だし協力的で入学2ヶ月目にして早くもクラスの代表格だ。

白いチョークを持って黒板にコンコンと当てながら赤川くんは言った。

「茜っ！何か無い？うちらを助けてよお」

美希ちゃんは不意に私にアイデアを乞う。

その表情があまりにも困惑してた様で、私は咄嗟に思ってもないこ

とを口走ってしまった。

「え……あゝ……劇、とか？」

クラスが少しざわついた。

美希ちゃんと赤川くんはお互いを見合って、赤川くんは男らしい大きな字で『劇』と黒板に書いた。

他のアイデアとしてビンゴゲームやダンスなどがあがっていた。

「劇ねえ……んじゃ劇で決定ね」

あっさりと決まってしまった。

まずいなあ。

手元に担任から配られたプリントに劇団の記事が載ってたからつられて言ってしまったがもうどうにもならない。

「それじゃ劇やるっつーことで異議とかある人……。はい無いねー」

ちょっと赤川くん！

みんなに考える時間与えてよ！

そんなこんなで私の出した案が無情にも可決してしまった。

放課後。

私は部室へ向かう準備をしていた。

「あっかねー」

準備を済ませた美希ちゃんが私の席の前まで来た。

「茜、劇なんてやりたかったの？」

「なんて言うか…プリントにさ…」

美希ちゃんは私の弁解を最後まで聞かずして続ける。

「でも助かったよー。ビンゴとかありきたりじゃん？ 劇なんてやるクラスないだろうし面白そうじゃん」

美希ちゃんが優しい笑顔で言うものだから私も笑うしかなかった。

「とりあえず脚本とか決めなきゃだねー」

「うん。何かいろいろ手間取りそうだね…」

準備を終え、教科書が入った鞆とバレエの用具が入った鞆を肩に掛け立ち上がる。

「ま、茜には発案者ってことで強制的に制作に参加していただきますから」

「えっ…でも私……」

美希ちゃんは

「さ、部室行こー」

と言って小走りに教室を出ていった。

もう後戻りはできそうになかった。
しょうがない。

腹をくくって制作に協力しよ。

思えばその行事が私と彼の距離を一気に縮めたんだろうな。

6. 日常

グラウンド。

夏の大会も近いということで、3年生をはじめみんな練習にも力が入っている。

予選1ヶ月前となると内容の濃い練習をさせてもらうのもレギュラーメンバーやベンチ入りのメンバーのみで、ベンチ外の選手は大体補助にまわっている。

俺は実力が評価されたのか一応レギュラーの先輩達と一緒に練習させてもらっている。

「はい次ショートっ！」

俺はグローブのついている左手を高々と挙げ大きく返事をした。

硬い硬式野球ボールを金属製のバットで打つ甲高い打球音を残して、強烈な打球が俺目がけて転がってくる。

（気合い入ってんなー…）

避けたくもなる速さの打球を俺は難なくさばいてみせた。

「いいぞ赤川っ！」

「どもー」

俺は賛辞の言葉を小声で返答した。

それからバッティング練習や実戦練習をこなし今日の練習は終わった。

太陽はとっくに沈んでいて外はもう闇につつまれている。

校舎の各教室から漏れる明かりのおかげで、俺に近寄ってくる正宗を認識させてくれる。

「お前はやっぱすげーな！」

正宗は強めに俺の背中を叩く。

「あれぐらい普通じゃね？」

「つかー！意識高い奴は言うことも次元が違うねー！」

背中を叩く力がどんどん強くなる。

「痛えーよ」

「レギュラーの越川先輩、ずっと調子悪いからひよっとしたら夏、しょーいちスタメンかもよ？」

だんだん背中がジンジンしてきた。

「先輩差し置いて1年坊の俺が出るわけないだろ。てか痛え」

「まあ最後の夏だしなあ：でも勝つためなら実力あるやつが出なきゃダメだろ」

もう背中の感覚がなくなってきた。

「越川先輩だって去年はベンチに入ってたらしいし、大会前には調子戻してくるだろ。てか痛えって」

「なんだなんだ、えらく謙遜しちゃって。試合出れるかもしれないチャンスなんだからモノにしなきゃ！」

俺の背中、大丈夫？

「謙遜なんかしてねーよ。でも：チャンスはモノにしないとな。：痛え：」

いつの間にか拳で叩かれているのを確認。俺はとりあえず正宗の行為を遮断するため、頭を渾身の力を込めて小突く。

「：悪い。痛いなら痛いって言ってくれなきゃわかんないじゃん：」

「はは：なかなか面白いこと言うなマサ」

俺は再度拳を握りしめ正宗に見せた。

正宗は両手を顔の前で合わせ

「：すいませんでした」と頭を下げた。

俺は大袈裟にため息をついてやった。

「しょーいち、今日も居残って練習してく？してくんなら付き合うけど」

だんだん背中感覚が戻り始めた。

「あー、悪い。今日はクラスの用事があるからまた今度頼むわ」

「ほーい。あ、旅行のやつか」

俺は部室でユニホームから制服に着替えながら頷いた。

「しょーいちんとこ何やんの？俺んところはビンゴやるらしいぞ」

俺はそれを聞いてほっとした。

心の中で宮城さんに感謝した。

「うちは劇。どんな話しかとかは今日決める予定」

正宗は真ん丸の瞳を大きくし、もの珍しそうな顔をした。

「へえ、変わってんなあ。発案者だれ？」

「宮城さん」

「茜ちゃんかあ！あの子はいいよ、うん。実に可愛らしい」

何だか一気に話題が逸れた。

「顔も可愛いし性格も可愛いし声も可愛い。身長は低いけど出るとこ出てるしなっ！」

正宗は妖しげで不気味な笑みを浮かべ、ヘラヘラしている。

「…最低だな。てか宮城さん彼氏おるって聞いたぞ？」

正宗が涎を拭うかのように口を袖で拭いた。

「んなもん関係ないんだよ！人間なるようにしかなんねーんだから」

正宗：宮城さん狙ってんのか？

それから正宗のわけのわからない持論講演会が開かれたので、俺の耳と脳はその話を聞かない方向で意見が一致した。

「んじゃお先！」

そう言って俺に手を振り正宗は帰っていった。

俺もすぐに着替えを済ませ、部室の鍵を閉め教室へと向かった。

7. 策士、策に何とやら（前書き）

6話と7話を間違えて投稿してしまいましたので置換修正しておきました。ただ本来の7話が消えてしまったのでわずかな記憶を頼りに再執筆致しました。内容的には大きい差はありません。また、話の展開的にも問題ないように思います。誠に申し訳ありませんでした。

7. 策士、策に何とやら

玄関。

俺は着替えや道具が入った鞆を肩に掛けながら上履きに着替える。ほとんど真っ暗な校舎内に不気味さを感じながら教室を目指す。

1年の教室は校舎の3階にあるため階段を登らなければならない。俺は階段を一段飛ばしから二段飛ばしへと切り替えて教室へと急いだ。

途中で視界に入る廊下は深い闇につつまれていて見るだけで少し寒気がする。

（急ぐか…）

廊下は走らない。

そんな張り紙を見て見ぬフリをし、教室までの廊下を走った。

三階までくると目的地である教室から明かりが漏れていた。

一気に廊下を駆け抜け教室の扉を開ける。

——ガラガラ

古い木製の扉を開けるとこれまでの明るさとは正反対の状況に一瞬目がくらんだ。

最初に飛び込んだきたのは、俺の席でしかめっ面で白い紙とにらめっこしている宮城さんだった。

「遅れてごめん」

「ううん、全然いいよ」

「美希は？」

「資料探しに図書室に行ったよ」

俺は教室の隅に鞆を放り一息つく。

「あ、席…ごめん」

宮城さんは思い出したように勢いよく立ち上がった。

「いいよいいよ。続けてて」

俺は宮城さんを促し教卓用の椅子を持って宮城さんの前に腰掛けた。

「どこまで進んだ？」

すると宮城さんは気まずそうな表情をして首を振った。

「まだ何にも…」

「どんな話にするか、とかも」

「美希ちゃんが学園もので昼ドラマみたいなやつにするって…」

昼ドラ？

あんなドロドロのをやんのか？

美希はどこか人と違った発想の持ち主だということを認識した。

「なるほどねえ…。でも面白そうじゃん」

「美希ちゃんらしいよね」

「まあー」

俺と宮城さんは同時に笑う。

可愛いっちゃあ可愛い。

いや、可愛いな。

いい匂いもするし。

って変態か俺は。

「劇なんて他がやらない事でしかも昼ドラネタってのがインパクトあっているな」

「話題性はばっちりだね」

それからあーだこーだ話を進めしぼしの沈黙が訪れた。

「あ、そういえば部活お疲れ様」

「どーも。宮城さんもお疲れー」

「どーもどーも」

俺の真似してんな。

「赤川くん上手なんでしょ？」

「いや、そんなことねーかな」

「先輩にも混ざってやってるじゃん」

「たまたまだよ」

「：別に自慢してもいいんだよ？」

数秒の沈黙。

「：まあ俺は中学ん時から上手いって言われてきたし、高校でも先輩なんかメじゃねーかなー。同学年のやつなんてもっての他って感じ」

ノリでそこまで言い終えると、ただならぬ空気を感じ無言な宮城さんを見た。

「：赤川くんって腹黒いんだね」

「いや宮城さんが言わせたんじゃない」

宮城さんは白い歯を見せて笑った。
人をからかって笑ってら。

「てか何で先輩と混ざってやってんの知ってんの？」

「えっ：それは：うん、美希ちゃんが教えてくれたんだよ！」

おいおい。

目が泳いでますけど宮城さん。

「ふーん」

俺はわざと意味深な返事をした。

「宮城さんってポジションどこなの？」

「言ってもわかんないと思うよ？」

「言ってくれなきゃ分かんないじゃん」

「…リベロ、ってところ」

俺はよくバレーを見るし小学生の時にバレーのクラブに入っていたため知っていた。

「じゃ宮城さんも俺のポジションくらい忙しく動くんだねー」

「いや、あそこまで走らないよ」

しめた。

「何で俺のポジションが走り回るって知ってんの？」

「えっ！？それはだって…その…」

嘘のつけない子。

さっきにも増して目が泳いでるし、俺と目を合わそうとしない。

「お楽しみのところ悪いんですけどお…」

扉の方から美希の声がして宮城さんと同時に視線を向ける。

「おかえり。資料見つかった？」

「ただいまー。てか昼ドラの資料が図書室にあると思う？」

じゃあ何のために行ったんだよ。

「…それじゃ何のために行ったかわかんないじゃん」

いいぞ宮城さん。

「ちょっとしたヤボ用でね」

そう言っつて美希は俺にウイנקをした。
意味がさっぱりわからん。

「てか二人きりでナニかしてたの？」

「ただ劇の話し合いしてただけだよ！」

「お疲れとか言い合っちゃって」

「いつからいたんだよ…」

俺は美希の意味不明な行動にため息をついた。

その内、見回りの先生に帰宅するように言われ、とりわけ何も決めずに俺たちは荷物をまとめ玄関へと向かった。

8. 輝く悪戯っ子

校門前。

後ろを振り返ると校舎の明かりは全て消えていて、いくつか灯っている非常口の緑色のランプが不気味に感じさせる。

「あたしこっちだから後は二人に任せるわ」

美希ちゃんは意味深な笑みを浮かべ、私達に手を振りながら颯爽と自転車を漕いで帰っていった。

「何なんだあいつは…」

赤川くんはほっぺを掻いている。そういえば教室で話してる時も何回か掻いてたような気もする。

「赤川くん自転車だし私は駅まで歩いて行かなきゃいけないからここで。それに逆方向だし」

私は氣を使って赤川くんに帰宅を促した。
でも少し期待なんかしたりもして。

「…そうだなあ。んじゃ今日はお疲れ。また明日な」

撃沈なのか？

いやいや、赤川くんはただのクラスメイトだし当然の返答。

私と赤川くんは別れの挨拶を交わし、私は駅へ向かった。

(…何か変だな私…)

この時既に私は赤川くんに惹かれ始めていたのかもしれない。

大通りにはコンビニやCDショップなどが立ち並び、その建物の辺りはかなりの明るさだ。

私はいつもの様に大通りから少し狭い小道に進路を変え駅を目指す。と、少し歩くと何やら背後から気配がする。

何だ？

チェーンが軋む特有の音がする。
自転車だ。

私の中の恐怖心が一気に高まる。そういえば朝礼で担任が不審者に注意しろとか何回も言ってた気がする。

多少歩く速度を速めたものの、自転車を漕ぐ音は徐々に近づいて来ている。

抜かしていけばいいのに。

そう思うと恐怖心はより一層大きさを増す。

突然私は後ろから口を抑えられた。

(…やだ…!!)

私は堪えていた涙が一気に溢れ出た。

「…大人しくしろ」

低い声で言われたが何だか妙な感じがした。
だって聞き覚えがある声なんだもん。

「……ふあか、がわふうん？」

口を塞がれながらもわかる様に名前を言った。

それと分かってしまった私があまりに無抵抗なため塞がれていた口は自由を取り戻す。

「あら、バレた？」

「…声で。ってかホントにびっくりしたんだけど！やめてくれる！赤川くんのばかり！」

振り返り泣きながら叫ぶ私に困惑したような表情をして慌てふためく赤川くんの姿があった。
でも少し安心したりして。

「あ、いや…その、泣かせるつもりは…なかったんだけど…」

「怖いから泣くに決まってんでしょ！」

赤川くんは何回も頭を下げ

「ごめん！」

と謝っていた。

腰を抜かした私はその場に座り込んだ。

赤川くんは目線を合わせるように屈んで俯いている私に何回も謝っていた。

俯いている理由は、くしゃくしゃになった顔を見られなくなかったのと、顔を上げると赤川くんの顔が近いから恥ずかしいっていう二つ。

ずいぶん前に止まったのだが、涙を拭うフリをして顔を上げる。

「大丈夫?…ごめんな」

やっぱ近い。

私の体温は一気に上昇する。

私はわざとらしくため息を大きくついてから言った。

「…もう。おふざけにも限度がありますよ!」

「反論はないです…」

しかし赤川くんは

「ただ…」

と言った。

「不審者多いって聞いたから心配になってさ…」

ダメです。

体温が上がりっぱなしです。

今なら体温計を壊すことができそうですお母さん。

私はものすごく早く鼓動する心臓の音を聞かれると思い、立ち上がろうとする。

しかし恥ずかしながら腰が抜けてしまって自力で立つことができない。

「あ、手……」

赤川くんの手が私に伸びる。

体温が、体温が。

上へ参ります。

天井が見当たりません。

私は変に躊躇した後、赤川くんの手を握った。

指は細いけど大きな手の平。

指の付け根にはマメが出来ている。

そういえば親指に絆創膏を巻いている。

頑張ってるんだな。

私はドキドキして熱いものの中に何だか暖かいものを感じた。

「…ありがと。それともう二度としないようにっ！」

「…イエス」

「はい、でしょ？」

「はい」

私はふざけた様にいう赤川くん、少しカチンときたが、安心感のが上回ってため息をついただけだった。

私を心配してくれた赤川くんは自転車を引きながら私と同じ速度で私の横を歩き、駅へと向かう。

きつとこれが私じゃなくても赤川くんは優しいから心配するんだろ
うな。

そういうところに皆惹かれるんだな。

駅に着くと私は鞆から財布を取り出し定期券を手にとる。

「…ありがと。でもちょっと赤川くんの人間性を疑ったかな」

「それについてはノーコメントで」

「じゃ、また明日ね」

「痴漢に合わないよーに」

赤川くんはあっかんべーをしている。

大人っぽい雰囲気なんだけど、こういうところは子供っぽくて可愛い。私も同じように舌を出してやった。

赤川くんの笑顔があまりにも輝いていて、駅構内の強めの照明は全く苦にならなかった。

9. 旅の始まり

旅行当日。

私は多くもなく少なくともない、いわば中途半端な量の荷物が入った鞆を肩にかけ登校した。

「おっはよー」

バスの駐車場と化したグラウンドに着くと美希ちゃんが元気よく掛けよってきた。

「美希ちゃんおはよっ」

「荷物少ないねー」

美希ちゃんは親切にも私から鞆を取り上げバスのトランクに入れてくれた。

私はお礼を言い美希ちゃんとバスに乗り込んだ。

大体の生徒は事前に決まっていた座席に腰掛け、騒いでいる。

早くもおやつを食べる男子。

友達とトランプしている女子。

私は一番後ろの一つ前の席に座る。

隣はもちろん美希ちゃん。

「あれからどうなのよ、その後は」

席で一息つくと美希ちゃんが私の耳元で囁くようにそう言った。

「…あー。赤川くん？」

美希ちゃんはウインクする。

綺麗なんだけどこういうことする時は可愛いんだから。

「何かあるわけないでしょ。赤川くんは私に彼氏がいるの知ってるんだし」

美希ちゃんはすねた様に

「ちえっ」

と唇を尖らせた。

「しかし、茜もよく続くねえ」

腕組みをしながら美希ちゃんは言った。

「…でもほとんど連絡取ってないしその内自然消滅、なーんて」

私はおどけてみせた。

もう彼とは付き合ってそろそろ2年になる。自分でも結構続いたと思う。

彼が私にとって初めての彼氏だからかもしれない。

前は会う度に緊張したし手など繋ぎもしなかった。

しかし今となっては会うこともさながら、メールも電話もしない。

友達に言われることは決まって

「別れれば？」

だ。

「2年にもなるのに自然消滅とかあるんだねえ…」

「…まだ消えてないけどね」

私はできるだけ明るく振る舞った。

赤川くんは彼女とかいるのかな。

私はふと思いついた疑問を美希ちゃんに聞かずにはいられなかった。

「美希ちゃん、赤川くんって彼女とかいるの？」

「お、茜もついに乗り換えるか」

「違うけどさ」

「翔ちゃん狙うとなると敵が多いぞー？」

「いや、だからそんなつもりは…」

「翔ちゃん誰にでも優しいからなあ。でも茜なら応援しちゃうぞっ」

話し聞けよ。

一人で盛り上がっている美希ちゃんを無視し、窓から外を見る。

（あ。赤川くん…）

私は重そうな鞆を背負い、いそいそとバスに駆け寄る赤川くんを見つけた。

（朝…苦手なのかな…）

直に赤川くんもバスに乗り込んできた。

赤川くんは一番後ろの5つある席のど真ん中に座った。

男子は5人が後列の五席を占領している。

少し後ろを振り向けば赤川くんの顔が見える席に私はいる。

まあ後ろを見る機会なんてあまりないだろうが。

席が前後ゆえ話し声は丸聞えだ。

「ってかグラウンドにバス入れんなよな」

赤川くんは少しムツとしている様子。

何でもせつかくグラウンド整備したのにこれじゃまたやり直しだ、とかなんとか言ってたなあ。

さすが野球少年だ。

私は一人でやついていた。

その内バスが出発し、目的地の旅館までの旅が始まった。

彼の優しさに触れ、また一步彼との距離を縮める旅が。

10. ライバル？

旅館　王鶴。

これからお世話になる旅館だ。

高い垣根に囲まれた旅館は全て木製で和を存分に施した綺麗な宿と
いった印象をうけた。

時刻は正午。

生徒は各部屋に案内され荷物を置いて、食堂にて昼食をとるように
と指示された。

俺はお腹が減っていたし隣の部屋の正宗を誘って食堂へ向かった。

「バイキングらしいよ」

「んじゃ食い放題だな」

「しょーいちってそんな細い身体しててよく食うもんな」

他愛もない会話をしていると直に食堂へ着いた。

かなり広い食堂の中心付近にこれでもかかってくらいの豪華な料理が
並んでいた。

和食を中心にデザートやケーキなどもあった。

俺は溢れ出しそうな涎を必死に飲み込み食事にありつく。

「マサ、この唐揚げ食ってみ」

「：んゝ、うまいっ！てか全部うまい！」

「翔一郎…くん」

正宗と夢中で料理を貪っていると、ふいに後ろから声を掛けられた。
見覚えのある顔。

「覚えてる？」

「ああ…」

背中まで伸びたサラサラの茶色い髪、身長は高からず低からず。
綺麗な二重瞼に大きな瞳は吸い込まれそうなほど澄んでいる。
同じ中学でいろいろとあった高村樹だ。たかむら いつき

「久しぶりだね…こうして話すの」

「そうだな」

「ちょっと二人で話さない？」

樹はそういつて申し訳なさそうに正宗を見た。

「…あ、今度はあのメシ食ってみよー」

視線に気付いたのか正宗はそそくさと離れていった。

「あの人も野球部？」

「ああ」

「ふふ。可愛い子だね」

「童顔だからな」

「翔一郎くんだってなかなか可愛いわよ？」

「よせやい。首筋が痒くなる」

☆

「あら、翔ちゃん先に取られちゃったね」

美希ちゃんが眉をひそめて言った。

何をしてるんだ私は。

赤川くんと楽しげに会話する女子を大きな柱に隠れて観察している。

「同じ中学なのかな？」

「あたしも知らないなあ。よし、今度探りを入れとくか」

そう言う美希ちゃんの右手には、溢れんばかりの料理が乗ったお皿がある。

それを時折頬張りながらも視線は二人から離さずにいた。

無論美希ちゃんが発見し今の状態に至るのだが。

「茜、どうすんのよっ！」

美希ちゃんは口の中に何か含みながら私の背中を叩く。

手で唐揚げ等をつまんでそのままの手で私の背中を。私は制服が心配になった。

「どうって…私はただ劇のリハやるか聞きたいだけだったし、それにまだ時間あるから大丈夫だよ」

私は微笑んで不機嫌そうに料理を口いっぱい頬張る美希ちゃんに言った。

「さすが翔ちゃん。敵は予想以上に多いな」

美希ちゃんはチラッと横目で私を見て微笑した。

「だから私はっ……！」

「茜っ！翔ちゃんとあの女子がどっか行くよ」

「えっ！」

突然だったので声が裏返ってしまった。

見ると先生達の目を気にしながらも、隙を見て食堂を出る二人が目に入った。

「怪しいな…」

「トイレかもよ？」

「何で男女が一緒にトイレ行くのよっ！」

「…具合が悪いのかも」

「さっきまで元気に食べてたのに？」

「…毒とか」

「殺す気か」

そして私は美希ちゃんに引っ張られ、二人の後を追う羽目になった。

でも何だろう。

私の中で焦りなのか不安なのか言い表しにくいモノが込み上げていく。

ただの友達でありますように。

自然とそんな祈りが頭に浮かんでいた。

11. キス

中庭。

ひっそりとしていて落ち着いた雰囲気の庭だ。

池では大きめの鯉が数匹優雅に泳いでいる。

脇には獅子おどしも設置してあり、規則正しく乾いた音を奏でている。

「相変わらず野球小僧してるの？」

「まあな」

「野球以外は興味ないって感じ？」

樹は屈んで鯉を眺め髪をかき上げる。

「今のところは」

俺は樹から少し離れた所で立っている。

てかまだ食い足りないんだけど。

早く解放してくんねーかな。

「彼女できた？」

ふいに樹は立ち上がりこちらを見つめる。

「ノーコメントで」

「ふふ。言うと思ったわ」

目を細め優しい笑みを俺に向ける。
何だってんだ。

「樹は？」

「あら、翔一郎くんから聞いてくるなんて珍しい」

「いつから君付けになったんだ？」

「呼び捨ての方がいい？」

樹は首を傾げ意地悪っぽくいう。

樹は中学3年間ずっと俺の彼女だった。

知り合ったのは樹が俺の試合を見に来ていて、試合後に声をかけられ話すようになった。

それからメールなどもして俺は中学1年の夏休み前に告白を受けた。その時は別に断る理由もなかったし印象も良かったから俺はOKした。

それから普通にデートなどしたし付き合いは至って普通の恋人同士のものだった。

別れたのは樹の浮気。

俺が野球で構ってやれなかったってのもあるが、浮気されたこっちとしちゃ頭にくる。

必死に弁解する樹を後目に俺達は中学卒業と同時に別れた。

後から聞いた話によると、その当時樹は4人の男に手を出していたらしい。

俺もその中の一人か。

「私は今模索中よ」

「そか」

俺は食べ足りないせいかなそれ以上話を掘り下げる気はなかった。とにかく樹とは少し気まずいし、あまり関わりたくなかった。

「なかなか世の中うまくいかないものね」

「まだ15、16の若者が世の中とか言うなよ」

「翔一郎だってまだ15じゃん。誕生日8月だったよね？」

「ん…まあね」

これも男を落とす策略なのだろうか。

いちいち誕生日を覚えるなんて大変だろうに。

ましてやそこら中の男に声を掛けてられて嫌な顔一つしない樹の事だし。

「寂しいな……」

ふと樹を見ると相変わらずまっすぐ俺を見ている。

しかしなんとなくだが悲しそうな目をしている。

「…ちょっとだけ頭撫でてくれない？」

「やめとけ。ゴツゴツしてるから摩擦で火が出るかもしれん」

樹は少し笑ったかと思うと俺の方へ歩いてきた。

…何か嫌な予感がする。

☆

…嫌な予感がするなあ。

赤川くんは何だか神妙な面持ちをしてるし、女の子の方もちょっと泣いてる気がする。

「高村樹ねえ…」

「名前わかったんだ」

「あたしの情報網にかかればこんなもんよ」

怖っ。

自慢気に笑う美希ちゃんから赤川くんに目を戻す。高村さんが段々と赤川くんに近づいていく。

何だかいかわしい雰囲気だ。

「ちょっとちょっと、チューとかしちゃうんじゃないの!？」

美希ちゃんは眉間に皺を寄せ怪訝そうな表情をしているのだろうが、今は美希ちゃんを見ている場合じゃないぞ。

「あ、寸前で止まったね」

「…何だ、面白くない」

すると赤川くんは少し照れたように周りを見渡してから高村さんの

頭に手を置いた。

「あらやだ」

「いい子いい子してるのかなあ」

二人の距離は腕を前に伸ばしたくらいの近さ。

その気になれば抱きつくことだってできる距離。

嫌な予感がする。

こういう時の嫌な予感は当たるんだ。

高村さんは思いつきり赤川くんを抱きついた。

「おほっ。やだやだ。茜、一步も二歩も後退なんじゃない？」

「何言ってるの！」

美希ちゃんは両目を隠すようにして手で目を覆っているが、指の間から確実にその光景をまじまじと見ている。

高村さんの両腕はきつく茜くんの腰に回されている。

赤川くんはというと突然の抱擁に戸惑っているのか、行き場のなくした両腕が宙を彷徨っている。

「チューとかしないのかな」

「∴嫌な予感がするんだよね」

私の嫌な予感によく当たるんだ。

高村さんは手を赤川くんの顔に持っていき自分の顔に引き寄せる。

「まさかのまさかだよ茜！」

12. 前の恋と池の鯉（前書き）

サブタイトルを18禁時代とは違うサブタイトルに変更致しました。

12. 前の恋と池の鯉

おいおい。

どうなっただよ。

頭撫でたら解放されるかなと思ってしょうがなくやったら何だこの状況は。

しかもちよっと苦しかったのが緩んだと思ったら今度は樹の顔が近くなる。

これはいかん。

「ちよっ…！」

俺は首に力を集中させそれ以上顔の前進を食い止めた。

「キス…してよ」

涙目ながら言う樹の表情に一瞬心が揺らいたがなんとか理性を保った。

「馬鹿いえ。俺は樹の彼氏じゃねー」

「翔一郎ならいいもん」

こらこら。

「子どもなんだから…」

「何とでも言え」

「ケチ」

「ケチだし」

「女泣かせ、悪魔、ガリガリ」

「ガリガリは言い過ぎ」

「…セクハラ」

「こっちのセリフじゃ」

それから樹はクスツと可愛く笑った。

「…今日はここまでで我慢しておく。次は、するから」

「我慢し続けることのできる人間は強くなるぞ」

そう言った俺に

「単細胞」

と捨て台詞を吐いて樹は去っていった。つくづく手のかかる女だ。よく彼氏でもない男と…キス？なんかできるな。

まあ俺の場合は『元』がつく彼氏なんだが、その関係も切ってしまうばただの他人、てか。

さて。

「…で、その2人」

俺は振り向いて物陰に隠れているはずの人物に声をかけた。

「何でバレたの？」

すると、申し訳無さそうに腰を低くした美希と宮城さんが出てきた。

「バレたってか食堂にいた時からコソコソと」

「さすが野球選手、視野が広いこと広いこと」

「ストーカーか」

俺はこっちの気も知らずヘラヘラしている美希に呆れ返っていた。

「宮城さんまで…」

「わわわわたしは、その、美希ちゃんに強引に連れて来られたわけ
で…」

嘘のつけない人。

目が泳いでる。

慌てて弁解を続ける宮城さんがおかしく見え俺は少し笑ってしまっ
た。

「何か用事でも？」

「あ、そうそう。リハーサルはやるのかなあって」

俺は樹のおかげで劇のことなど頭に入ってたから返答するの
に数秒かった。

「あ。んゝとりあえず台詞合わせだけやって本番の身振り手振りはアドリブで」

「そんなにいけるの？」

「僕は君たち2人を信じてます」

「過信しないでね」

とりあえずご飯が食いたかった俺は夜に打ち合わせするのだけ伝えて食堂へ戻った。

池の鯉は相変わらず優雅に泳いでいた。

13. GREEN

夜。

お世話になる旅館の方々への挨拶、その後旅行のテーマに沿った学習などを経て先ほど夕食を済ませた。

もちろんバイキングだったわけで。

私は部屋で一人、劇の構想を練っていた。

(んゝゝ)

一応今日の予定に一段落ついたため、制服からジャージに着替えシヤーパーンをクルクル回しながら、それをたまに耳にかけたりして考えていた。

「茜、行くよっ！」

美希ちゃんがペットボトルのジュースと少量のお菓子を持って部屋に駆け込んできた。

「基本美希ちゃんって落ち着きないよね」

「あたしが落ち着いてたら男達がうるさいでしょ？それより早くっ」

「…はは。ってどこに？」

すると美希ちゃんは妖しげな笑みを浮かべた。
でも大体予想はついてた。

「翔ちゃんどこ。今先生たちみなで会議中だし今しかないぜ」

そう言って親指を立て私の手を引く。

もちろん女子が男子の部屋に行ったりするのは禁じられている。
その逆なんかなおさら。

赤川くんの部屋まで行くのには、先生達が交代で見張りをしている
階段を通らなければならない。

狙うなら先生が交代する瞬間。

見張りの先生は次の見張りの先生を呼ぶため一瞬だけ警備が薄くなる。

狙うのはそこ。

部活中と同じくらい真剣な顔をして美希ちゃんと言った。

「ちっ：こんなときに限って見張りが緑ちゃんだとは：」

美希ちゃんは小声でそう言い唇を噛んだ。

緑ちゃん、って言うのは私たちの体育の教科担任でものすごく厳しい男の先生。

可愛い名前とは裏腹にとてつもない体躯をしてる。

自分の筋肉をアピールするためにわざと小さめのシャツを着てると
かなんとか。

階段の踊り場で仁王立ちしている緑ちゃんを見つからないように監視する。

見張り交代まであと10分。

「緑ちゃんだと少しハードルが高いわね」

少しため息をついた。

「鈴江せんせー！」

すると下の階から杉くんの高い声が聞こえた。
ちなみに鈴江先生とは緑ちゃんのこと。

「おお、杉か。どうした？」

仁王立ちしていた緑ちゃんは踊り場から姿を消し杉くんの元へ向かった。

「僕の部屋のトイレ詰まっちゃったんですけど」

「どんだけ出すんだお前はー」

「多からず少なからずです」

「ぶはは。しかし健康でよろしい」

どうやら杉くんの部屋のトイレが詰まってしまったらしい。

私と美希ちゃんは緑ちゃんがいた踊り場まで静かに降りて行き、手摺の陰に隠れて状況を見守る。

杉くんは私たちに気づいているようで、チラチラこちらに目を向ける。

「もしかして杉くん…」

「気のきく坊やだこと」

杉くんが緑ちゃんの手を引きながら部屋へと誘導する。

その後を追うように私たちも見つからないようにコソコソと後をつける。

「せんせー直してー」

「すぐ直してやるから待ってろ」

「いや、そんなに早くなくてもいいってかむしろチンタラ直して」

「…何故に？」

杉くんは緑ちゃんが部屋に入ったと同時に、曲がり角に身を隠していた私たちの方を見てウインクした。

「今ね…！」

そう行って私たちは一気に廊下を駆け抜け、杉くんの部屋の手前、目的地とする赤川くんの部屋へと駆け込んだ。

14. お酒のチカラ

「よっしゃ！」

急いで赤川くんの部屋に駆け込んだ、というか滑りこんだ私達はすぐに扉を閉めた。
部屋の中には黒の長袖シャツに紫のハーフパンツを身につけたラフな赤川くんがいた。

「さすがバレー部。マサのトスを上手くレシーブしたな」

「今頃あたしの打ったスパイクが相手コートにボールがめり込んでいるな」

美希ちゃんの力なら考えられなくもない。

「やっぱり杉くん知ってて…」

「俺が言ったら協力してくれるって言うからさー」

赤川くんは冷蔵庫から缶の飲み物を取り出した。

「いる？」

「あら、もちろん」

美希ちゃんの顔はそれを見た途端、笑みが溢れた。

「ちょ：私達まだ15歳だよ！」

「いいのいいの。こういう時は15も20も変わんないわよ」

いや変わるだろ。

美希ちゃんは赤川くんにもらった缶チューハイを勢い良くあけ喉を潤す。

「だはー！こりゃうめえ！」

オヤジ？

美希ちゃん本当はいくつなの？

私が心の中で問いかけている間に美希ちゃんはもうもらった缶チューハイを飲み干していた。

「飲みっぷり最高だな」

「もー一本持ってこーい」

たまにしゃくりあげている美希ちゃんはすっかり出来上がってしまった。
っていた。

二本目も豪快にあげ飲み始める。

「宮城さんは？」

飲めないんだけど：やっぱ飲んだ方がいいのかなあ。

「飲め！茜が飲まなきゃ誰が飲む！」

あんただろ。

とつくに目がすわってしまっている美希ちゃんは、酔っ払うと何だか色っぽく見える。

「んじゃ宮城さん梅酒から行こかー」

「はーい」

そう返事すると赤川くんは笑みを浮かべ私に緑色の缶をくれた。

タブを起こすと炭酸が少し抜けたような爽やかな音と共に微細な水滴が飛んだ。

私はそれを一口飲む。

「…うまーい！」

「あら茜、お酒も飲んだ事なかったの？」

「ビールならお父さんに飲まされてあるけど、苦くて無理だあ」

「まだカクテルとかあるからさ」

赤川くんはそういって赤や黄色の缶を次々に取り出した。

お酒のせいか私もすっかり酔ってしまっていた。

「そだ！夏にみんなで海とか行こーよ！」

泥酔とまではいかないが、相当酔った美希ちゃんがそんな話を持ちかけてきた。

「みんなって？」

「んゝ：あたし、茜、翔ちゃん、まっちゃん？」

ちなみにまっちゃんとは杉くんのこと。

「いつものメンバーじゃん」

「いーじゃん。もちろんお泊まりで」

酔っている美希ちゃんがウインクをすると余計に綺麗に見える。

しかし赤川くんとか男子は美希ちゃんの魅力に気付かないのかなあ。そんな綺麗な美希ちゃんを見ても赤川くんは呆れ返ったようにため息なんかついてるし。

「いや、しかし泊まりはそれなりにヤバいんじゃない？」

「そーよねー。翔ちゃんとまっちゃんが、いつあたしを襲いにくるか心配よね…」

「いや、むしろ逆じゃね？」

「茜は何としても守るからね！」

「……頼りにしてます」

異性との宿泊なんてウチの親が許すわけがない。でもそんなことは今の私達には考えもつかなかった。

『消灯ー。消灯ー。生徒達は速やかに就寝することー』

あ、緑ちゃん。

もう消灯か。

「他のみんなは？」

「あー多分：麻雀だろ」

おい。

突っ込みどころ満載な男子達だな。
まず15、16の子供が麻雀するなよ。

「んじゃここでお泊まりの予行演習ってことで」

「なっ：美希ちゃん何言ってるの！」

「それに見回りがいっぱい戻れないし。あたし達の事はちゃんと手、打ってあるから」

そう言って美希ちゃんは携帯を私に見せた。
なるほど。

今の世の中はこうも便利に、ってそんなんでいいのか？
あれこれ悩んでいると緑ちゃんが各部屋を見回りに来ている声がした。

それも既に隣の部屋まで終わったようだ。

「就寝だー。寝てるかー」

私達は咄嗟にお酒の缶を隠して電気を消し、自分達は近くの布団にくるまった。

暗闇の中、私の首筋に暖かくてお酒臭い吐息があたる。
美希ちゃん？

いや美希ちゃんであってほしい。

これが赤川くんならとんでもないことになってしまう。

お酒で熱った体がより一層熱を帯る。

今までこんなにドキドキして布団を被ったことはなかった。

15. 大きな独り言

誰だろ。

っていかどっちだろ。

「宮城さん？」

ぐは。

赤川くんだったか。

でも声のする方が違う。

私は布団から顔だけを恐る恐る出した。

すると赤川くんが自分の布団の上であぐらをかいて座っていた。

「緑ちゃんならもう行ったよー」

私は暗闇の中、扉の方を見るとそこには閉ざされた扉が静かに佇んでいた。

「そこのお嬢さんは寝ちゃってるし」

私の方を指差して赤川くんは少し笑った。

視線をやや下に持っていくと美希ちゃんがすやすやと、いや鼾とまではないかないが多少大きめの寝息を立てながら眠っていた。

「美希ちゃんか…」

「何が？」

「いやっ！こっちの話！」

赤川くんはまた笑った。

「赤川くんは眠くないの？」

「俺？そりゃ酒飲んでないからねー」

私は赤川くんの語尾が少しだけ伸びる話し方がどこことなく好き。

「あれ？そうだったけ？」

「うん」

そう言っただけで赤川くんはポカリの缶を私に見せた。

じゃそれを知ってたなら私は布団の中でドキドキしなくて済んだわけか。

一人でバカみたいだな。

しかもドキドキしてた相手が美希ちゃんだし。

「宮城さんは眠くないの？」

「私はちよつとしか飲んでないし」

「でも梅酒2缶半は飲んだね」

「あう…」

たじろぐ私を見て赤川くんは三度笑った。

「そういえば赤川くん劇……」

「あ、今更赤川くんなんて呼ばないでよ」

「じゃ何て呼べばいい?」

赤川くんはほっぺを掻きながら

「うーん」

と唸っている。

「…ダーリン、とか?」

「…却下」

赤川くんはさつきより派手にどっと笑った。
からかわれてんな私。

「ははは。嘘だよ。宮城さん彼氏いるしね。美希ちゃんと一緒にいいよー」

お腹を抱えてうつすらと涙まで浮かべて笑ってら。
そんなところ可愛いんだけど何だか俯に落ちない。

「翔ちゃんね。じゃ翔ちゃんも宮城さん、ってのは無しね?」

「何て呼ぼうか?」

私はさも当然のことかのように言い切った。

「ハニー」

「却下ー」

お互い予想していたのか二人して大笑いした。

「あー面白っ。茜でいいよっ」

「茜…」

急に真剣な顔と低い声で翔ちゃんが言うものだから私は無意識に背筋が伸びてしまった。

「はい？」

「その…彼氏くんとはうまくいつてんの？」

普段翔ちゃんとはそんな話なんかしないから変な緊張が私にはあった。

「ぼちぼちかなー。それより劇…」

「美希ちゃんが茜たちうまくいつてないって言ってた」

予想だにしない展開に私は切り返すことができずにいた。
何俯いてんだ茜。

「別れるの？」

翔ちゃんはポカリを一口飲んでから心配そうに私を見つめた。

「んー…もうずっとメールこないし自然消滅待ち？みたいな」

私は顔をあげ誰でも苦笑いつて分かるように笑ってみせた。
翔ちゃんの表情は変わらず、ずっと私を見つめている。

「茜からメール送らないの？」

「だって…何か…」

翔ちゃんはまた一口ポカ리를飲む。

「意地っ張りなんだね」

ちよつとムツとした。

でも当たってるから反論できないよ。

「こっからは俺の独り言だから」

翔ちゃんはそう言ってポカ리를一気に飲み干した。

「返事が返ってくるかは別として何か送った方がいいと思うな。彼氏さんだって意地張って送んないのかもしれないし。別れ話が出ないのなら、少なくともお互いに嫌いってわけじゃなさそうだし。とにかく、何かしないとこのままズルズルいつてもしょうがないと思う。」

明らかに独り言ではないが私は黙って翔ちゃんの言葉を聞いた。

「野球に例えちゃわかんないかもしれないけど…無死満塁で打者がものスゲー強打者でも投げなきゃいつまでたっても始まんないんだし。投げたら意外に抑えることが出来るかもしれないし。茜たちの

今の関係もそうじゃないかな。言わなきゃ始まんない、伝わんない。結果がどうか、それは出てから考えればいいと俺は思うな」

心に響くってのを実感した。

翔ちゃんはそこまで言い終えると恥ずかしそうにほっぺを掻いた。独り言じゃないじゃん。

「てゆうーか野球って先を読むスポーツでもあるんだけどね。“たられば” じゃあんまよろしくないし」

自嘲気味に笑う。

でも何だか私の気持ちにかかっていた曇が少しずつ晴れていくような感じがした。

何かちよつと楽になったかな。

感謝感謝。

「…ありがとね。何か気持ちが楽になった。明日にでも何かしらメール送ってみる」

笑顔で言う。

そしてもう一言。

「独り言だからね」

翔ちゃんは嬉しそうに笑った。

そして赤ちゃんがハイハイするかのように四つん這いで私の方へ近づいてきた。

「ちゃんと送れる？」

距離が近い。

月明かりのみで薄暗い室内だが、こう近いとはつきりと表情が見てとれる。

「でもいざ送ろうとなると勇気が出なくなるかも…」

「…だろうな」

翔ちゃんは少し笑ってから私に顔を近づける。

「勇気が出る魔法、知ってる？」

顔が熱い。

ていうか全身が熱い。

「…知らない」

「教えてあげよっか？」

大体予想はついたが、こんな展開になるとは…。

私はそう思いながらも一つ頷いた。

「じゃー目…瞑って？」

来たー！

彼氏がいるのに、彼氏がいるのに！

どうしよどうしよどうしよ…。

私は言われるがまま目を瞑った。

「いたーい！」

私の額に激しい痛みが襲った。

「あはははは！」

目を開けると目の前でお腹を抱えて笑い転げている翔ちゃんがいた。

「でこぴんー！？」

「野球部ではこーすんの」

「絶対嘘っ！」

「嘘じゃねーよ」

大爆笑する翔ちゃんを見て憤りを感じたが、確かに勇気が湧いてきた気がする。

優しいな翔ちゃん。

私は貴方の優しさに何度救われるのだろう。

16. final weapon

「おやすみなさい」

「おやすみー」

俺は彼女達に遠慮して、窓際に設置してある机と椅子をうまいこと繋げて寝ることにした。

しかし宮城さ…茜は可愛いな。

あんな彼女をほっとく彼氏の気持ちがわからん。

って茜は友達に散々言われただろうな。

まあ一理あるか。

とにかくメールするって言ってたし何か変わるだろ。

俺は瞼を閉じそんな事を思いながら薄れゆく意識に茜と彼氏の事を思っていた。

「翔ちゃん？」

ん？

もう朝？

にしては外は暗いけど。

「どーした？」

体を起こし部屋の方へ視線を向けると、茜が眉を寄せ困ったような

表情を浮かべていた。

「…何か、緊張して寝れなくてさ…」

「そりゃーな。とりあえず明日の事は考えずに今日は寝たら？」

すると茜は首を振って俯いてしまった。

気のせいかな顔が赤かったような。

暗闇に目も慣れたけど見間違いか。

「…違う。その翔ちゃんと一緒だから…」

見間違いでなかった茜の赤くなった顔は妖しい上目使いで俺に視線を送った。

「はい？」

あまりのことで素頓狂な声を出してしまった。

「その…一緒に寝て欲しいんだあ…」

無理無理無理無理。

そんなことできませんよ。

理性が吹っ飛びそうになるのを、茜に見られないように自分の太股をつねり抑える。

「男と女が一緒に寝たら危ないって親父が…」

出来る限り平静を装って言ったつもりなんだが茜はクスクスと笑っている。

「やっぱ翔ちゃんは面白いなあ」

「だから…なっ！頑張って一人で寝よう」

茜は相変わらず含み笑いを続けていたが、その内さっきまでの妖艶な表情に戻った。

「翔ちゃんならいいかな…」

何が！？

「…おいで？」

俺の体は脳の行くなという指示を全く無視して茜の隣へと向かった。

「あんなところじゃ風邪引いちゃうよ…」

茜は掛け布団を持ち上げながら少し布団の端に寄った。

俺の体は誘われるがまま、茜の体温で温まった布団の中に収まった。

「あったかい？」

俺は一つ頷く。

「ふふ。私も」

あどけなくて可愛いいつもの笑顔は、今現在影を潜め妖しげな誘い笑いへと変貌を遂げている。

「ここは熱いくらいなんだけどね…」

そう言った瞬間、俺の五感の一つがとてつもなく冴えわたった。

手に柔らかな感触。
これは…。

「ドキドキしてるの、わかる？」

手のひらの柔らかな感触から早めの鼓動が伝わってくる。
俺は何度も頷いた。
下半身が熱い…。

「でも：服の上からじゃわかりにくいか」

目の前の茜は俺の手を少しの間どけて、あろうことかジャージを脱ぎ、小麦色の肌が露になった。

「恥ずかしいから：あんまり見ないでね」

そしてまた俺の手を元に戻す。

目は直視できないから首筋に視線を落とす。しかし僅かに汗ばんだ鎖骨が妙に妖しくて視線を落とす。

しかしその先には鎖骨なんかよりもっとすごいのが現れた。

俺の手が見える。

ということは…。

体温が一気に上がった。

豊満な胸が視界に入り釘付けになる。

俺の大きめの手でも少し溢れるくらいの大きさだ。

『小さな体して出てるそこは出てる』

マサの言葉を思い出して一人納得する。

「あんまり体には自信ないんだあ…」

そんなことないっすよ。

俺はつい力が入ってしまい、茜の胸においてある手がピクリと動く。

「んっ……」

茜は日常では決して出さないような喘ぎ声らしき声を発した。
そのせいで俺の理性は完全に吹っ飛んだ。

「翔ちゃん…いきなり…」

俺は茜の可愛らしい水色のブラを乱暴に剥ぎ取り露になった乳房を揉みしだく。

「…んんっ…」

俺は茜の首筋に舌を這わせその都度漏れる茜の吐息を聞きながら胸を愛撫する。

「もう…いいよ？」

涙目ながら俺を見つめる息の荒い茜に俺は――――。

「翔一郎っ！」

その声に俺は机と椅子を並べただけの簡易ベッドから勢いよく落ちた。

「…ってー」

「何涎垂らしてんのよ。それにそれは何？」

床に打ち付けた腰をさすりながら顔をあげるといつもより大迫力の美希が立っていた。

「それって…」

「翔ちゃんの最終兵器よっ！」

何だか美希が恥ずかしそうにしてるから俺は寝惚けた頭を振って辺りを見渡す。

「あら…」

「あら、じゃなくて！どんな夢見てたのっ！」

ああ。

ありゃ夢か。

もったいな…夢でよかったな。

俺としたことが茜をあんな風にするなんて最低だな。

俺はすぐさま思考回路を切り替えて気持ち悪いくらい当たり前に言った。

「ああ…そんなんじゃないよ」

嘘つきめ。

「男のこれは生理現象だよ」

「いいからバカみたいに落ち着いてないでトイレ行けば？」

俺は促され…いや強制されてトイレへ駆け込んだ。

——ピーン

俺の頭が冴えわたり何かを閃いた。

（これだな…）

俺は用を足し洗った手をシャツで拭い部屋に戻ると一目散に茜の元へ駆け寄った。

茜はまだ寝ていたのだが、お構いなしに話しかけた。

「茜っ！ 全く手付かずだった劇の構想が固まったぞ！」

すると茜は

「うーん…」

と唸って目を擦りながら上半身だけ起こした。

「おはよ…何？」

「だから劇の……」

俺は少し開けたジャージのファスナー越しに見える茜の谷間に一瞬目が奪われてしまった。

——ぼんっ

俺は一気に体温が上がるのを感じた。
多分顔は真っ赤なんだろうな。

「…劇？」

「ん…そう、劇の…あれが…」

「いい精神科の先生教えよか？」

俺は美希の言葉に否定も肯定もせずただ俯いた。

悪い夢を見たもんだ…。

17. 果報は…

2日目。

今日はレクリエーションの時間に、全クラス集まって出し物を発表する日だ。

私は朝翔ちゃんに無理矢理起こされ劇の構想の説明を一気に受けた。寝惚け眼ながらこれまでで台詞をしっかりと暗記し、短いが一通りリハも行なった。

その時の美希ちゃんと翔ちゃんの演技力は目を見張るものがあつた。二人とも役者さんになれるよ。

それと台詞と言っても私の場合一言二言しかなく、あとは翔ちゃんと美希ちゃんの独壇場。

本番もリハを一層上回る名演技を見せた二人。

でも一ヶ所だけリハからどうしてもうまくいかない場面があつた。私の台詞なんだけど…どっか変なところもあるのかな。

「…おいで？」

その途端に翔ちゃんは頑に拒否をする演技なのだが…。

——ぼんっ

リハの時同様に翔ちゃんは顔を真っ赤にしてその場で固まってしまった。

その後は美希ちゃんがしっかりフォローをし劇は無事(?)に終了した。

「いやー最優秀とまではいかなかったけど優秀賞取れるとはね」

美希ちゃんは表彰式でもらった賞状を眺めて嬉しそうに言った。

「ってか二人とも演技うますぎだよ」

私は羨望の意を込めた眼差しを送る。

「よく分かってるじゃない」

謙遜しないところが美希ちゃんらしいっていうか…。

「それより、翔ちゃん！本番になってまであれは何？」

美希ちゃんは鋭い目つきを翔ちゃんに向けた。

翔ちゃんは苦笑いをしてほっぺを掻いている。

何だか翔ちゃんが縮んで見える。

「何か朝から変ね」

「別に普通じゃんよ？」

「…昨日の夜、茜と何かあったの？」

あるわけないでしょ。

あのあと翔ちゃんは私達に気を使って離れて寝てくれたんだから。と言いたいんだが何故か言い出せないでいた。

「ないですよ」

「正直に言ってみろ、コラ」

「ホントにないですってば…」

「怪しいな。言わないとコンクリ詰めにして海に捨てるぞ」

「いや、それだけは勘弁してください大魔王さま」

「…いや、そこは女王さまとかじゃないの？」

美希ちゃんと翔ちゃんのこんなやりとりは私的にかなりツボ。
でもとりあえず翔ちゃんの味方をする。

「美希ちゃんホントだよ？翔ちゃん私達に気を使ってあんなところで寝てくれたんだもん」

美希ちゃんは横目で私を見て不適な笑みを浮かべた。

「茜、いつから翔ちゃんなんて呼ぶようになったの？」

「う……」

してやったりといった感じで美希ちゃんは目を細めた。

「やっぱり何かしたんでしょこのやろー」

「してねーよ！ちょっとした雑談してただけだ」

そうだ。

今日は翔ちゃんと約束した通り雄也にメール送らなきゃ。

何て送ろうか。

とりあえず無難に『元気?』とかでいいか。

「雑談って：エッチなこと言ったりしてないでしょうね?」

「するわけねーだろ。君の脳内コンピュータは朝からそんなやましい事しか弾き出さないのか」

「一言多いんですけど!」

「かかってきやがれ」

美希ちゃんと翔ちゃんは互いに舌を出しそっぽを向いた。

芸人として生きていけば結構イケるんじゃない?

私は二人をなだめながらも笑みが溢れてしまう。

☆

夜。

私は部屋で美希ちゃんと、この旅行で仲良くなった香坂心ちゃんこいざかしんと
トランプをしている。

心ちゃんは黒のショートで左の耳には二つほどピアスがついている。
聞けば軽音楽部に入っていてバンドをやっているとのこと。

私より小柄で手足も折れそうなくらい細い。

「ちっ：くそつたれ：」

色白でモテそうなのだが切長の目とその：言葉遣いの荒さであまり

男の子が寄ってこないそうだ。

女の子もあまり近寄らないそうだが美希ちゃんだけはやっぱり別格で。

「だははー！心ババ引いてやんのー！心理作戦に引っかかりよったわい」

「うっさいなー…ばけなす」

美希ちゃんの明るい挑発に心ちゃんは無表情で棘のある言葉を返す。
そんなことで怯まないのが美希ちゃんだと私は一人思う。

「ババ引いた子が偉そうな口のきき方ね。そんな可愛らしい顔してても男が逃げるわよ？」

「美希と同じで寄ってこねえから心配すんな」

「くおらっ！」

結構いいコンビじゃん。

いっそのこと翔ちゃんも含めて三人で…って私は何を考えてんだ。

「そーいや茜。雄也くんにメールしたの？」

そう言って美希ちゃんは私の手札を一枚引いた。

「お、ペアできたーっ」と

ハートとダイヤの8を捨て山に嬉しそうに放る。

「…何で知ってるの？」

「ふふん。甘く見ないでよ？あれは寝たフリよ」

「…詐欺師になれそうだね」

私は深々とため息をついた。

得体の知れない情報網と行動力、それにあの演技力が備われば無くもない、と私は感心すらした。

そう言われてみれば翔ちゃんと話してた時、豪快な寝息は聞こえてこなかった気がする。

「もう…。…まだメールしてない」

「雄也って彼氏？」

心ちゃんの手札から一枚取ろうと手を伸ばしたらババの持ち主にそう問われた。

「うん…。でも全くメールしてないから今更何か…」

私は伸ばした手を引っ込め目的もなく手札に並べられたカードに目をやる。

「ふーん。じゃ今から送れば？」

心ちゃんは側に置いてあったパックのレモンティーをすすった。

「うー、でも心の準備が…」

「翔ちゃんのでこぴんを無にするの？」

美希ちゃんは眉を寄せて少し声を張って言った。
一部始終聞いてた訳か。

「……わかったよ」

私は手札を見られないように床に伏せ、ポケットから携帯電話を取り出した。

久しぶりだな。

メール作成画面に雄也の名前が出るなんて。

「何て送るの？」

心ちゃんが身を乗り出して携帯の画面を覗き込む。

「そんな…普通に元気かって」

「大人しいね」

心ちゃんは可愛らしくクスツと笑った。

今の心ちゃんを男子が見たら確実にポイントは上がっただろうな、と不謹慎なことを考えつつメールを作成する。

『久しぶり♪元気にしてますかぁ?』

そんなちんけな内容を打ち終えて送信ボタンを押す。

「あんたねえ、メル友じゃないんだからもっと何かあるでしょ」

心ちゃんと同じように画面を覗き込んでいた美希ちゃんが耳元で唸った。

「でも…こんくらいが無難じゃない？」

「無難って…彼氏に気なんか使う必要ないじゃん」

「あたしもそう思うな。長いこと付き合ってたんだろ？連絡とってないって言ったって急に距離置く必要ねえんじゃないか？」

美希ちゃんと心ちゃんの言葉がグサグサと私の心に突き刺さる。そりゃもう容赦なしに。

「お、なかなか気が合うな香坂くん」

「おめえは一体何キャラなんだよ」

そこからしばらく美希ちゃんと心ちゃんの言い合いが始まり、私はメールどころじゃなくなっていた。

そんな時。

——♪——♪——

私の好きなアーティストの曲が流れ、場が一瞬氷ついたように止まる。

「あたしもその曲好きー！」

「いいよねえ！」

「そんなんでもいいだろ！とりあえずメール見ろ！」

心ちゃんに叱咤され私は渋々携帯を開く。

何だか緊張する。

合格発表の通知が郵便で届いた時、一番に開ける時みたい。

私は唾を飲み込み、ゆっくりと受信ボックスを開いた。

18. 大事な時

「翔一はさあ」

鈍ってはいけないと思い、旅館の駐車場で蛍光灯に照らされた明るい場所を探しマサとキャッチボールをしている。

「ん？」

マサからの送球を受けながら片眉を上げ返事をする。

「彼女とか作んないの？」

「んー…今は野球で精一杯だからなあ」

受け取ったボールをマサへ。
よし、ストライク送球だ。

「翔一のこと気に入ってる子、いっぱいいるじゃん」

「そんなんわかんねーじゃん」

「出た。モテる男の嫌味とも取れる謙遜」

なわけねーだろ。

言葉のキャッチボールの方が進む中、きりのいい所で本物のキャッチボールを終え、電灯の下に並んで座り込む。

「興味が無いの？」

「いや、ないってわけじゃねーけどさー」

浮気されたらやだし。

とか言ってるんねーな。

恥ずかしくてしょうがない。

「俺さー、翔一にはもうちょっと周りを見てほしいんだよね」

マサは自分のグラブをいじりながら言った。

「そーだなー。ランナーがいた時の状況判断をもう少し…」

「野球じゃなくて！」

と、一喝されてしまった。

いつもヘラヘラしてるくせに。

生意気な。

「野球に一直線ってのも翔一らしいっちゃあ翔一らしいんだけどさ」

そこで区切りマサは頭を掻きむしった。

「なんて言うか、野球以外の事に対して曖昧というか…」

マサは言いにくそうにあちこちをキョロキョロしている。

「あんまりあやふやな態度じゃ、いつか一番大事な事にもあやふやで終わっちゃって後で後悔することになると思うんだよね。特に翔

一の性格からして」

マサは寝転がり夜空を見つめている。
その表情はどこか儚げで。

「大事な時にかっこよく決められないヤツ」

寝たまま俺を指差す。

「カッコとか関係あんのか？」

「あるんだって」

そう言つてマサは起き上がり親指を立て自分に向ける。

「今の俺、かっこいいでしょ？」

ウィンクなんかしてら。

「…まあな」

俺は呆れと共に笑みが溢れた。

こいつは昔からいざと言うときにさりげなく頼りになる。

「やっぱ女の子ってのは大体男のかっこいいところに惚れたりすんだよ」

「ふーん」

「…茜ちゃんだってね」

何故茜が出てくるんだ。

俺は目を丸くしてマサを見た。

「茜ちゃんの事、さりげに気にしてるっしょ？」

「なんでだよ。んなわけねーだろ」

「好き？」

さっきから何言ってたこいつは。

「ないね。彼氏いるし」

俺は当然のことだとばかりに胸を張る勢いで言った。
微妙な達成感に浸る。

「とっちゃええば？」

「アホか。ドロドロなのは苦手なんだよ」

「劇でめっちゃくちやハマってたくせに」

「あれは役柄上での話」

何か今日のマサは変に俺を探ってきやがるな。

「じゃ茜ちゃんの事どう思うの？」

何でそう茜に限定するかなこいつは。

「どうって……元気でいい子って感じ。でもたまにひねくれてたりするんだよな。人の事からかって笑ってるからタチが悪いっつか」

愚痴にも似た茜に対する印象があれこれ浮かんでくる。

マサはそんな俺の様子を見て微笑んでいる気がした。

一通り言い終え、俺は妙に無言なマサに視線を送る。

「どーした？」

「いや、そこまで見てるんだなって」

「さっきから何が言いたいんだ？」

「好きとまではいかないにしろ、気になるんじゃない？茜ちゃんの事」

「そんなわけっ……」

否定しようと言い返そうとする俺を指差すマサに威圧され押し黙ってしまう。

「あやふやにすんな」

わけわかんねー。

「気になるんだろ？」

なわけねーだろバーカ。

「悪いところ、今出てる」

うるせーよチビ。

余計なおせっかい寄越してくれちゃってよー。

あーあ、おかげで俺の中で何かが変わっちまう。

「…翔一」

「……氣に、なる」

茜はいい子だ。

明るくて元気で…その元気を他の誰かにわけてあげてるみたいに、周りのツレも自然と笑ってるし。

俺もそのツレの一部なんだけど。

頼まれた事にいちいち文句言ったりしてるけど、その割にちゃんとやってるし。

優しい。

「へへ」

マサはあどけない顔で白い歯をむき出しにして満足気に笑った。

こいつのこの顔は心底嬉しい時の笑顔。

俺は全身恥ずかしさに包まれながらもつられて笑った。

「……何笑ってんだよ」

「翔一が真っ赤だからかな」

「バーカ」

俺はマサの頭を軽く小突いた。

「おらぁ！お前ら風呂の時間だぞ！」

旅館の玄関から緑ちゃんが叫んだ。

俺たちは立ち上がり、尻の砂埃を払う。

「なかなかっこよかったっしょ？」

「野球してる時並にな」

背の低いマサは俺を少し見上げながら、

「今の時間、俺にとっちゃ大事な時の一つだったからね」

調子に乗んなチビ。

まあっこよかったけどさ。

「なんなら写メ撮っとく？」

「いらん」

19. 君の優しさ

なんて返ってきたんだろ。

普通に『元気？』って送ったんだから向こうも普通に『元気』とか言ってくるんだろな。

そこからどんな話題を切り出そう。

私はあれこれ考えながら受信ボックスを開いた。

『ごめん！誰だっけ？』

チーン。

普通に返されるどころか忘れられてる。

普通の女の子だったらここで怒って電話掛けたり、悲しくて泣いたりするんだろうけど、私はただ呆然と携帯の画面を見つめるしかなかった。

「…茜？」

美希ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「茜っ！携帯貸せっ！あたしはこいつに一言言ってやらねえと気が

済まねえ！」

心ちゃんが相当お怒りなのか眉間に深い皺を寄せ目を見開きながら私の携帯を握る。

「だめっ！」

私の携帯を耳に当てた心ちゃんから強引に携帯を奪い返し、電源ボタンを押す。

どうやら幸い向こうには繋がってなかったみたいだ。…幸いなのか？

「バカかお前はっ！こんなやつホントはぶん殴んなきゃいけないえんだけど、今は出来ねえから言いたい事言ってやんなきゃいかんだろうが！」

心ちゃんはうるさく説教をする生徒指導の先生張りに怒鳴った。

私のために思ってた言ってくれてるのはわかる。

でも今は…。

「…いいよ。喋りたくもない…」

「茜……」

不思議と悲しくはない。

何だか呆れに似た感情が込み上げてる。

私は本当にこの人を好きだったのかな。

それとも、いつの間にか好きって感情なんか消えちゃってたのかな。

「…いいの。ホラ、言った通りでしょ？自然消滅するって」

自分でも驚くほど明るく言えた。

「…お前、こんなんでいいのか？」

心ちゃんが親身になってくれてる。

ありがとね。

美希ちゃんといい心ちゃんといい、私は優しさに包まれてるんだなあ。

「さっぱりしてていいんじゃない？何か思ってもみない返事が来て逆にスパッと吹っ切れたかなあ」

私ってすごいな。

こんな状況でも笑えてる。

でも美希ちゃんと心ちゃんの方が、あまりにも衝撃を受けたらしく、沈んでいる。

私は何だか居た堪らなくなってしまっ

「あ、飲み物ないね。私買ってくる！」

財布を持って二人の希望も聞かずに、逃げる様に部屋を飛び出した。

☆

別に嫌な人じゃなかった。爽やかなスポーツマンで優しかったし、私の言うことにもキチンと耳を傾けてくれていた。

お互い恥ずかしがり屋で約2年付き合った中でキスは4回しかしたことがないし。

しかもほんの一瞬。

今思い出しても恥ずかしい。

そういえば数少ないデートでも、手なんか繋いだ事もなかったなあ。そう思うと私って本当に愛されてたのかなって思う。

玄関近くの自販機まで辿り付き何を買おうかと思った途端に、

涙が溢れた。

何で？

何で今更？

何で悲しくないはずなのに涙が出るんだろう。

私の意思に逆らって涙は溢れ、自販機が水中にあるかの様にぼやけていた。

「あー、良い湯だったなー」

側の風呂場から杉くんが伸びをしながら出てきた。もちろんぼやけていたが声で彼だと認識。

「シャンプーぐらい持ってきてやがれ」

その後に聞こえた低い声。

ぼやけててもわかった。

背の高い彼は私を見つけたのか、こっちへ近づいてくる。

背の低い彼は部屋へと戻って行くようだ。

やばいなあ。

泣き顔見られちゃうよ。

彼に見られるのは二度目かな。

でも涙の理由は前とは全く違うんだ。

「外、行こうか」

私の肩を優しく叩いて彼は言った。

ああ。

私は彼の優しさにも包まれてるんだなあ。

20. 星の光

湯冷めしそう。

まあいつか。

俺は何かわけありの茜を外へ連れだし、なるべく人気のない場所へ連れていく。

俺の足が向かったのは、前に樹と話した中庭だった。

「まあ座ろ」

池の側にあったかなり大きめの石に腰掛けた。

茜は泣いている。

でもそれを俺に悟られまいと手で顔を覆い、必死に隠している。

たまにしゃくり上げたり鼻をすすったりしてるから隠すも何も…もうバレてるっての。

とりあえず泣きやむまで待つか！。

池の水は夜ということもあって真っ黒で、住民である鯉の姿も見えない。

空を見上げれば、マサとキャッチボールしていた時、爛々と輝いていた星たちも雲がでしゃばり隠れてしまっている。

相変わらず無言のままの状態が続いた。

端から見たら俺が茜を泣かしたみたいに見えるだろうな。

ま、誰も来ないだろうからいいか。

しばらくすると茜のしゃくりも鼻をすするのも無くなり茜は顔を上げた。

「湯冷め…しちゃうよ？」

「昔から体だけは強い方だから大丈夫」

「バカは風邪を何とかって言うしね…」

「そこまで言ったら普通わかるだろ」

茜は軽く笑った。

今さっきまで泣いてたくせに。

人をからかうのだけは忘れねーんだなこの娘は。
俺も半ば自嘲気味に笑う。

「…って」

「ん？」

かすれた声で茜が言うものだから聞き取れなかった。

「誰だっけ？って言われちゃった…」

茜は視線を落とすこともなく前を見続けている。

ああ。

連絡とったんだ。

「…ネタじゃね？」

「そんなの浮かぶ人、翔ちゃんしかいないと思う」

俺は努めて明るく振る舞う。

「そっかー」

「……」

傷心の茜に掛けてあげれる言葉が浮かんでこなかった。
慰めの言葉。

励ましの言葉。

そこからの数秒の沈黙が俺には何十分にも感じられた。

「…好きだったのかな」

茜は依然として前を見ている。

先には綺麗に整えられた垣根しかない。

明るい内はそれなりに楽しめそうだが、暗いとただの黒い壁にしか見えない。

「…泣くくらいなんだから好きだったんだろ」

「違うの。最初はすっごく自然に笑えたんだ。悲しくもなくてムカつきもしなくて泣かなかったし」

そう言って少し視線を落とす茜。

「でも美希ちゃんと心ちゃんに気を遣わせちゃ悪いと思ってジュース買いに来たら無意識に涙がさ…」

シンちゃん？

んー…。

あ、香坂さんか。

「だから好きだったのかなって」

「…茜は優しいんだな」

こちらでも無意識に言葉が出てきた。

「彼氏の事よりも友達の方を考えちゃうんだからな」

「だって二人とも優しいから…」

「それは茜が二人に優しいからだよ」

そういえばマサが大事な時は…とか言ってたな。

俺が思うに今は結構大事な時だよし。

俺は勝手に今が大事な時だと決めつけた。

「でも今思うとフラれて当たり前かなって思う」

「…ってかフラれたって言うのか？」

「そりゃアドレスも消されちゃったくらいだし…」

「アド変で送り忘れとか」

「彼氏に送り忘れるわけじゃないじゃん。…もう彼氏じゃないけど」

何か卑屈になってんなー。

「つてか何ヶ月も彼女と連絡取らなくても平気な男ってどうかしてるよねえ！」

「…そりゃ正常ではないんじゃない？」

「異常だよ、異常！こっちはそれなりに気にしてたのに挙げ句の果てに『誰だっけ？』って何！？」

おー。

言いたいこと言ってらー。

「…気にしてたんならメール送ればよかったのに」

「それはちよつと…私が折れるみたいで抵抗あった」
なかなか強情だな。

「とにかくっ！別れて正解だった！」

「そうなの？」

「そうだよ！」

「じゃ何でまた泣いてんの？」

茜はあーだこーだ言ってるくせに涙を流していた。

「あれっ…！？何でっ！？」

自分でも訳がわからず泣いていたようだ。

そんな茜が気になる：

いや、好きだ。

「強がんなよ」

「そんなこと…ないもん」

「違えよ。俺の前でもってこと」

茜は涙を拭くのをやめ、まじまじと俺を見る。

「泣きたい時は泣けばいい。そしたら明日…いや、1秒後にでも茜は強くなれる」

大事な時。

普段自分の格好なんか気にした事もないけど、茜の瞳に映っている今の俺はかっこいいのかな。

「泣くなとは言わんから思いっきり泣いたれ」

俺は無意識に茜を抱き寄せ微笑んでいた。

そしたら茜はダムが崩壊するかの如く今まで以上に泣いた。

俺の胸の中で。

俺は茜が好きだ。

いつしかでしゃばりの雲は通り過ぎ、幾多の星たちが俺たちを照らしていた。

21. 声

俺は茜が好きだ。

でもこの気持ちは伝えない。

伝えられない。

別れてすぐの彼女に気持ちを伝えるのは何だか彼女にとって酷な気がして。

さらに考えさせてしまうと思う。

だからこの気持ちは伝えない。

俺の中でそっと閉まっておこう。

あれから俺と茜との関係は何も変わらなかった。

それまで通り会話もしたし、美希やマサと一緒に遊んだりもした。

高校三年になった今でも俺たちは変わらなかった。

「いよいよ明日だなー」

練習後の部室。

明日の高校野球最後の大会を迎えることについてマサと語る事になった。

「なるようになるだろうー」

「翔一は昔からそんな調子だな」

「人間そんな簡単に変わんねーよ」

一度確立した人間の性格ってのはそう簡単には変わらない。いつかやっていたテレビ番組を見て得た情報。

確かにそれは言えてる。

マサだって昔から足の速さ以外何にも変わってない。

足は日に日に速くなってる気がするし。

性格も変わらなければ思いだってそう変わる事はない。

俺はあれからずっと茜が好きだ。

「茜ちゃん応援に来るのかな」

「来るって言ってたぞ」

「よく知ってんなー。さすがストーカー」

「意味が分からん」

マサは俺の気持ちを知ってる。

あの旅行の出来事を俺がマサに伝えたからだ。

マサは冷やかしたりせず、真剣に俺の話を聞いてくれた。さすが。

「んじゃ翔一が活躍すんのは確定だなあ」

「まだわかんねーだろ」

「出た。得意の謙遜ですかー」

とりあえずマサの頭を小突き俺は着替を済ませた。

「とにかく、明日は絶対勝つぞ」

「もちろん。俺が墨上駆け回るからちゃんと還してくれよ？」

「任せろ」

そういつて俺たちは帰路に着いた。

☆

「ただいま」

俺は居間で寝転がっている親父にそう言い、着替をするため二階にある自分の部屋に向かった。

扉を開け、電気をつける。

大きくはないが寝心地の良いベッドに倒れ込み見慣れた天井をあてもなく見つめる。

（メールでも送ってみようかな…）

もちろん送る相手は一人しかない。

携帯を開き、メール作成画面の宛先の欄に意中の名前を選択する。

♪～♪～

携帯からお気に入り曲が流れ、新着メールを受信したことを知らせた。

（まさか…）

若干の期待を胸に受信ボックスを開く。

F r o m .. 美希

S u b .. エール♪

本文

練習お疲れえ♪いよいよ明日だね!! あたしは翔ちゃんらが負ける事なんて考えてないからよっ☆精一杯暴れてこいや親友!!

美希かい。

少し期待はずれな感じがしたが素直に嬉しかった。

感謝と明日への意気込みのメールを作成している途中でまたもや新着メールが届いた。

F r o m .. 茜

S u b .. 練習お疲れ様☆

本文

練習お疲れ様（＜|＞）明日は応援行くから絶対勝ってね!!

うおっ。

茜からのメールで一瞬画面を見たまま固まる。
とりあえず美希に返信し、茜への返事を考える。

(：どうせなら直接言ってもらいたいな)

俺は茜の電話番号を表示し通話ボタンを押す。

何でもいいんだ。

ただ頑張れって言ってくれるだけでもいい。

君の声が聞ければ。

それが俺を励ます言葉なら俺は何だって頑張れる。

22. 祈り

♪~~~~♪

大好きなアーティストの曲が流れた。

「電話だ…」

部屋で雑誌を読んでいた私は持ち物を雑誌から携帯に持ち換え画面を見る。

(翔ちゃんだ…)

私は変な緊張感から唾を飲み込んだ。

私は雄也と別れて以来彼氏はできていない。

別にこれと言って好きな人もいないだろう…多分。

でもあれから翔ちゃんのが気にはなっている。

3年間同じクラスだし翔ちゃんの行動を目で追ってしまう。

好きなのかな。

ってか翔ちゃんは相変わらず人気があるようで同学年だけでなく、後輩からも何度かアプローチを受けたらしい。全く。

私は一呼吸おいて通話ボタンを押す。

☆

「もしもし」

『お、こんばわ』

「こんばんわ。どうしたの？」

『いや、大した用はないんだけどさー』

「じゃ切るね」

『∴相変わらず突き放すねー』

「冗談だよ。いよいよ明日だね」

『だなー。とうとう来たなー』

「応援行くから絶対勝ってね！」

『たりめーよ』

「負けたら？」

『…負けない』

「言うねー。さすが赤川くん」

『だろ？』

「…調子に乗らないの」

『へーい』

「生意気な」

『あのさー、お願いがあんだけど』

「何？」

『…あの、そのー…実に照れ臭いというか、キモイというか』

「…そのモジモジがちょっとキモイかも」

『うおい！』

「嘘嘘。お願いって？」

『……頑張れって言って』

「…」

『…』

「無理」

『言え』

「ガンバレ」

『カタコトかい』

「はは。…頑張れ翔ちゃん！」

『…』

「聞いてんの？」

『茜が好きなんだ』

「はい？」

『茜が好き』

「どうしたの？急に…？」

『…返事は大会が全部終わったら聞かせて。んじやおやすみ』

「ちょ…翔ちゃん！？」

『———』

「…」

☆

あれは告白？

翔ちゃんが私に告ったの？

頭の整理がつかなくて私の思考回路がこんがらがっている。
そんなときは我等が親友のお言葉を。

『もっしー』

「あ、美希ちゃん？」

『あたしの携帯に掛けてんだからあたしに決まって…』

「翔ちゃんが私の事好きって…」

『…』

「…」

『あらー。茜もモテるんだねー』

「真剣なんだけど」

『…茜が翔ちゃんをどう思ってるかじゃない？あたしが付き合うな
って言ったら付き合わないの？』

「いや、そういう訳じゃ…」

『茜の気持ち次第だよ。あたしはあんたらお似合いだと思うけどね。…ぶっちゃけ茜は好きなんですよ?』

「ん…」

『茜は正直者だからすぐわかるんだけどね。ま、まずは明日、翔ちゃん達を応援してあげなきゃだよ』

「…うん」

『赤川翔一郎は好きな人の前でカッコいいところ見せれる男だから、きつと明日は活躍して勝ってくれるよ』

「うん…」

『分かったんなら良し。健闘を祈る!』

「何か変な感じだけどありがとね」

『何かおこれよ』

「…嫌」

『このっ…!』

☆

続きを聞かずして強制終了。

：翔ちゃんの事は好き。

うん。

何か一緒に居て楽しいし何でも言える。

私の気持ちを美希ちゃんと同じくらい分かってくれる。

こんな人が彼氏ならいいなってどこかで思ってた。

ふざけあってもいざと言う時はとてつもなく頼りになる。

私なんかじゃ勿体無い気もする。

でも他の子と付き合ってたら何かヤダ。

：わがままだな私。

翔ちゃんはわがままな私も分かってて好きなのかな。

とにかく、明日は翔ちゃん達が勝てるように一生懸命応援しなきゃ。

（明日は絶対翔ちゃん達が勝てますよーに！）

私は手を合わせ夜空の星たちに願った。

23. 凜（前書き）

更新が遅れまして申し訳ありませんでした（汗）

23. 凜

夏。

毎日ヒトの平熱程の気温が体力を奪っていく。

人間ってこんなに熱いんだ。

しかしこんなくだらない事をよくこんな状況で思えたものだ。
グラウンドじゃ選手達が泣き崩れてるってのに。

一回戦負け。

それはあまりにもあっけなく終わった夏だった。

1点差。

たかが1点、されど1点。

私もバレーで嫌というほど経験したからよくわかる。

試合に負けた選手達は試合後のグラウンドに泣き崩れていた。

普段凄まじく陽気な杉くんも泣いてるのに、背番号6を着けた赤川翔一郎だけは笑顔でナインをなだめている。

悔しいくせに。

泣きたいくせに。

みんなと野球やりたいって思いが一番強いのは貴方のくせに。

泣きたいときは泣いたらいって言ったのは貴方のくせに。

貴方はいちいちカッコいいよね。

いつも自分より他人本意なんだから。

試合終わって声掛けた時も貴方は笑ってた。

「負けちゃいましたー」

笑って言うかな。

私の方が泣きすぎて逆に貴方になだめられてたし。

悔いが残った貴方はすぐに大学でも野球するって言った。

私は応援するよ。

貴方が何かに没頭してる姿はとてつもなくカッコいいから。

まだ夏休みは始まったばかり。

杉くんの呼びかけで打ち上げをするらしいんだけど、仲の良い美希ちゃんや私も呼ばれた。

「お、来た来た」

待ち合わせ場所である焼肉屋に着くと、入口付近に杉くんと翔ちゃんが目に入った。

それからすぐに美希ちゃんと、あまり翔ちゃん達とは関わりが無かっただろう心ちゃんも到着した。

「あれ、心も？」

「…来ちゃいけねーのかよ」

「あ、俺が呼んどいたよ。心ちゃんも仲良いんだしいいじゃん」

杉くんはそう言って白い歯を見せ笑った。

あ、杉くんちよつと背が伸びたかな。

「んじゃ中に入ろっか」

翔ちゃんの一声で私たちは店内へ入った。

店内は焼肉屋らしい活気の良さに加え食欲を駆り立てる香ばしい薫りがし、悪い気はしない。

元気のいい店員に案内され私たちは座敷席に落ち着いた。

「さ、何食べる？」

翔ちゃんは慣れた手付きでメニューを開き、杉くんとあれこれ言い合っている。

そういえば翔ちゃんの私服姿見るの初めてかも。

いつも遊ぶ時は学校帰りとかだったから何か新鮮。

派手すぎない紫色の上着にジーンズと、至ってラフな格好だ。

首元には質素にならないよう、かつでしゃばらない程度のネックレスもしている。

何着ても似合うんだろうなあ。

「お待たせしましたー」

いつの間にか頼まれていたカルビやらロースが机上に並ぶ。

「んじゃとりあえずお疲れさんって事でカンパーイ！」

私と翔ちゃんはドリンクバーのジュースで、あとの3人はいっちょ前に生中で乾杯した。

グラス同士がぶつかり奏でる甲高い音色に私は気分が良くなる。

「んじゃ結構前に行こって言ったお泊まり海水浴の事だけどみんな大丈夫っすか？」

美希ちゃんは美味しそうにカルビを頬張りながらみんなに言った。
海か。

そういえばそんな話題出たっけ。

「マジ？このメンバーだよ？勿論賛成だよ」

杉くんは元気良く右手を挙げた。

「おいおい、あたしは何も聞いてねえんだけど」

「いいじゃん。心はどうせ暇なんだし」

「おめえと一緒にされることでうまい肉も不味くなるんだな」

「うおい！」

やっぱりこの二人息が合ってるわ。

心ちゃんは身長こそあまり変わってないが、茶色に染め、肩まで伸びた髪の毛が少し大人っぽく感じさせる。
変わったのはピアスの数ぐらいかな。

「俺は賛成だし…翔一は？」

翔ちゃんは少し間を置いてから言った。

「んー…いつやるかによるかな」

「あ、そーか」

何だこの気になる返答は。

「んじゃ翔一の都合に合わせてるって感じでいいっすか？」

「いいっすー」

美希ちゃんもそろそろ出来上がる様子だ。
変わらないなあ美希ちゃんは。

それから私も調子に乗ってビールやチューハイを飲んだりした。
でも相変わらず翔ちゃんはジュースしか飲まなかった。
泥酔し服を脱ぎ始めようとする美希ちゃんを必死に押さえ込んだりしながらも、仲良し同士の打ち上げは終わった。

後日、海水浴の件は打ち上げから10日後にやるというメールが杉くんから届いた。

一泊二日だけの短いお泊まり海水浴。
私にとってこれほど考えて、これほど大切にしなくちゃいけないと思った旅行は初めてだった。

24. 夏の風物詩

残暑が厳しい八月の朝。

外の蝉たちは早起きで俺は目覚ましで鳴る前に目が覚めた。

（蝉…うるさっ…）

腹に掛けてあるだけのタオルケットを退かし、俺は体を起こす。

（出発まであと2時間もあるな…）

今日はマサや美希、香坂さん、それに茜と泊まりがけで海水浴に行く。

出発は10時。

8時に目覚めた俺はとりあえずリビングへ向かった。

「何だ、翔が早起きなんて珍しいな」

リビングの扉を開けると、親父がソファに座って朝刊を読んでいた。

「蝉…うるせーんだもん」

俺は冷蔵庫を開けコーヒー牛乳をコップに注ぎ、口にした。
うめえ。

「今日旅行だろ？」

「んー」

「誰と行くんだ？」

「…マサ達」

「“達”って他は？」

「友“達”」

「……うまいこと言うな」

そのやりとりの間、親父は一度も新聞から目を離さない。放任主義な赤川家の大黒柱の性格は知ってるから俺もコーヒー牛乳に集中していた。

「とりあえず事故には気をつけろよ」

「ほーい」

軽く返事をして俺は洗面所へ向かうとリビングの扉に手を掛けた。

「…あと子どもなんか作ってくんなよ」

何言ってやがる。

てか何で女子もいるって知ってんだ。

いや…知らんはずだ。

「その時はよろしく」

俺は至って冷静に冗談で返した。

「無理」

「無理なのが無理」

「無理なのが無理ってのが無理」

「…小学生か」

「社会人です」

俺は黙って洗面所へ向かった。

☆

「朝だよ！」

お母さんにどやされ私は目を覚ました。
時計に目をやると丁度8時を指していた。

「今日美希ちゃんと旅行なんですよ？早めに支度しなさいよ」

お母さんは私の部屋のカーテンを開けて言った。

「うーん…蝉うるさっ」

私はまだ眠たい目を擦りながら洗面所に向かう。

（うわ…髪ぼっさばさ…）

鏡に映る自分を見て溜め息をつく。
とりあえずシャワー浴びよっかな。

私はそのまま浴室へ向かった。

パジャマを脱ぎ、下着姿になる。

（んゝ…もう少しお腹の肉をなあ……）

お腹に知らぬ間に滞在している女の敵をつねりながら思う。

（胸は…）

小さくはないけど大きくもないと思う。

サイズで言うところ…3つめくらい。…翔ちゃんはどのくらいが好みなんだろう。

ってアホか。

何考えてんだ茜。

私は一人そそくさとシャワーを浴びた。

「そろそろ行く時間でしょ？」

リビングでくつろいでいるとお母さんが洗濯物を手に言った。

「そだね。そろそろ行くよ」

「…事故に遭ったりしないよーに」

「はい」

「…ホントに美希ちゃんに行くんでしょうね？」

待て。

動揺するな茜。

「当たり前でしょ」

「…お母さんは結構鋭いのよ？」

「行ってきました」

私は荷物を持って逃げるように家を出た。

今日翔ちゃんにはあの返事をしようと思う。
考えて考えて出た私なりの結論を。

25. 赤黒橙

「海ー！」

目の前に広がる一面の青は、蒸し暑いこの季節の鬱陶しさを一気に拭いさつてくれる。

私は美希ちゃんや杉くんのいつにも増して高いテンションに連れられ叫んだ。

「早速泳ぎますか」

翔ちゃんは叫びはしなかったが、既に海水パンツを履きゴーグルと浮き輪を装着している。
何かみんな子どもみたい。

「俺が一番」

そう言って勢い良く砂浜に駆け出して行った。

「させるかあああ！」

負けじと杉くんも着ていたタンクトップを脱ぎ捨て翔ちゃんの後を追う。

軍配は杉くんに上がったようだ。

「元氣だなーあいつら」

心ちゃんはピアスを外しながら苦笑いしている。

「あたしらも行きますか？」

美希ちゃんに誘われたが私はまだ水着に着替えていないのに気づく。

「あ、私まだ着替えてないや」

「あたしもだから美希先に行ってろよ」

心ちゃんもまだ着替えてないらしく顎で美希ちゃんを促した。

「しょうがない…最初にあたしのナイスバディを見せるのは心惜しいが行ってくるか」

「…最初は汚いもん見せという綺麗どこは後に取っという方があいつらも喜ぶだろ」

心ちゃんの毒舌は相変わらずだな。

でも美希ちゃんは自分で言ってるようにかなりのナイスバディ。

「心め…自分も綺麗どこだって言いたいのか？」

「あたしは汚くも綺麗でもないからあんたの後にすぐ行くよ」

心ちゃんはよく見るともう水着に着替え終わっていた。

「茜も早く来なよ。赤川が待ち焦がれてんだろうし」

心ちゃんったら…。

美希ちゃんはかなり露出の多い赤いビキニ、心ちゃんはイメージ（悪い意味じゃないよ）によく合ってる黒いビキニを身に付けている。二人とも高校生とは思えません。

可愛いすぎる。

そして大人っぽくて。

それにくらべて私は…。

「茜ーっ！早く来なよー！」

既に海で翔ちゃん達とはしゃいでいる美希ちゃんが私を呼んだ。

「は、はーい」

恥ずかしっ。

とりあえずバスタオル巻いて行くか。

私も海に向かって小走りに駆け出した。

☆

いやー、実に気分がよろしくて。

暑い日はやっぱ海だな。

俺はゴーグルを付けて潜水しながらそんなことを思っていた。するとあてもなく水中を彷徨っていると女性の足が視界に入ってきた。

（お、これはこれは…）

俺も男だな。

スラッとした長い脚は細いが筋肉質で、年上の爽やかなスポーツウーマンを想像した。

俺は多少変な期待を抱きつつ顔だけ水面から出した。

「翔ちゃんってば」

目の前にはそう言って下をちょこつと出し、ウインクしてきた美希がいた。

「…」

「何よ」

「いや別に」

「茜からあたしに乗り換える？」

「…勘弁してください」

「殴るぞ」

「僕は暴力的な女性はありません」

「やだあゝん。翔ちゃんったらえっちい」

「…ごめん。何か色んな意味で気分悪くなってきた」

「うおい！」

美希の蹴りが飛んできたが水中なので痛くも何ともなかった。

踵を返し、再び潜水に専念しているとまたもやほっそりとした女性の足が視界に入る。

（美希じゃ…ないな）

俺はさっきと同じ様に海面から顔を出す。

「…」

「あら」

「…何やってんだよ赤川」

「香坂さんっすか」

「…あたしで悪かったな」

「いや、美希よりは遥かにいいっす」

「ど、どういう意味だよ！」

何か香坂さんの顔が赤いぞ。

「水着も似合ってるし」

「…スケベが」

「一応男ですから」

「…まあそんなもんか」

呆れたように笑った香坂さんに少しドキッとした。
笑った顔可愛いじゃん。

そこらの男はどこに目を付けてんだ。

「…ジロジロ見んなっ！」

「すいませーん」

そろそろ潜水にも飽きたので香坂さんに平謝りして砂浜へ戻ることにした。

（茜…はどこだろ）

周りを見渡しながら砂浜へ上がると、バスタオルを巻いた茜が海岸からイソイソと砂浜へ降りてきた。

（どんな水着着てんのかな…）

俺は生唾を飲み込んで茜を凝視する。

…これじゃ変態だな。

「何恥ずかしがってんのよ」

美希が茜の元に駆け寄る。

「だ、だってえ…」

「あゝもう、こんなもゝん！」

美希は茜が体に纏っていたバスタオルを強引に剥ぎ取った。

「ちょ、美希ちゃん！」

「あらゝ、オレンジのビキニなんて可愛いもの選んだわね」

オレンジのビキニ…。

しかもパレオ付き。…可愛いっす。

やばい、上せそう。

「そんな可愛い顔してこの身体は反則だぞっ」

「…ちょっと！」

そう言うと美希が茜の胸を…。

あー。

ダメだこりゃ。

気付くと俺は宿泊先であるホテルの部屋に寝かされていた。

…こりゃ重症だな。

何やってんだ俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4139b/>

Someday

2010年12月19日01時57分発行